序

東亞は進みつゝある。而して支那も前進しつゝある。問題は東亞の進む路と支那前進の方向とは果して完全に一致し得るか否かにある。何故なれば、全支那の前進の方向は未だ必ずしも明かではないからである。南京政府の進路は明瞭に宣明せられてゐる。このことは周知の通りである。然し、重慶政權は果して何を目指してゐるであらうか。共產黨の進路は果して如何。支那にはまだ殘された問題がある。

大東亞の理想は、大東亞地域より米英の侵略勢力を驅逐し大東亞人の大東亞を造成するにありとせられてゐる。之が爲めには大東亞諸民族の完全なる一致協力を必要とすべきものたること論を待たない。而して其の協力の爲めに立ち上つたもの、卽ち、汪兆銘氏であり、泰國であり、緬甸、フィリツピン、マライ其の他の南方諸民族である。然るに、支那には仍ほ米英と結んで新東亞の理想を破壞せんとするものが殘存してゐる。それが蔣介石の重慶政權であり、ま

た共産黨である。南京政府の協力は明朗であるとしても、この重慶政權及び共産黨の殘存勢力に眼をつぶつてはならない。

日本は南方は於て米英と戰つて其の地域から之等諸國の侵略勢力を驅逐したけれども、南方諸民族とは戰はなかつた。然し、支那に於ては、日本は曾つて支那と戰ひ、而も其の一部に於ては今も仍ほ戰は續けられてゐる。日本の目的は抗日政權を打破するにあり、支那民族を敵とするものでないことは明確であるけれども、支那民族は果して何を目的としてゐるものであらうか。表層の流れに惑はされず、その民族的底流を見詰める必要がある。こゝに南方諸民族と支那民族との間に同一に律し難い所以がある。

ちよつと覗けば支那はよく分るやうな氣がするが深く見詰めると支那位分らない國はないと謂はれる。實際、私の三十年の體驗に照しても、支那は底知れぬ國であり、支那人も亦た底知れぬ民族である。それは底知れぬ無用のものと云ふ意味でなく底知れず强く逞しきものと云ふ意味に於てゞある。大東亞戰爭以來南方と深い交渉を持つやうになつて、南方へ行き南方から歸つて來た日本人は、南方民族はよく分ると言ひ、而して支那人の分らないことが益々はつきりとなつたとも言つてゐる。その底知れず分らない人々が私共の隣人であり又同居人でもある。而して支那事變處理はこの支那人を對手として行はれるものである。事變處理の容易ならぬことが思はれる。支那に關する限り二二が四と云ふやうに簡單にはいかないのである。定石なき定石を踏まなければならない。對支問題の難しさはこゝにあるのである。

然らば支那は結局分らないであらうか。支那に對しては何うすればいゝか。何人も一應はかういつた懷疑に陷るであらうが、しかし、それには又それを打破する道がある。卽ち、支那は分らないと觀ずることであり、而して支那的に考へて支那人に對することである。簡單に支那が分つたと思へばこそ一人角力ともなり、日本的に考へて支那人に對するところに豫期せざる結果も現れる。而も、その豫期せざる結果は時に幾年の後幾十年の後に現れるのであるから、對支政策亦た難しと謂ふべきである。この間の消息は支那人と四つに組んで血の滲むやうな苦鬪を經れば漸々分つて來る。表面、春の水の如く穩やかに流れてはゐるが、その底は必ずしも然らず。嫣然と笑顏を見せながら腹の中では如何にして此奴を殺してやらうかと考へてゐる圖など、到底日本人には出來ぬ藝當であり、又分らぬ世界でもあると思ふ。漠然と見れば支那は

よく分る。然し、見詰むれば見詰むるほど支那は分らなくなる。支那には昔から理想あり、而して支那人は好んで理想を語る。然し、其の行動は決して現實を離れない。理想を語りつゝ現實に行く。縱ひ、その理想と現實とは相反するものであつても。

私は、明治三十九年、日露戰跡見學の學生團の一員として大連、旅順から奉天、遼陽、鐵嶺、營口と巡り歩いた。之が私の支那へ渡つた初めである。さうして一時は氣候不順にして不潔な厭な土地だと思つた。然し、その大陸及び接した支那人はいゝ印象を與へた。厭な土地だと感じながらもその大陸と大陸の人々は忘れられず、何となく私の心を引きつけた。それが因緣で、結局、私は再び支那へ渡り支那で働く身となつた。

三十年近くも支那に居り或は支那の仕事に携はつてゐて、さて振り返つて見ると、自分の支那に對する考へ方も色々と變つて來てゐることが分る。然し、その變つたことには據りどころがあり、さうして、一定の段階を踏んでゐることを感ずる。初めは、前にも述べた通り、支那は氣候も惡く不潔で厭なところだと思ひ、支那人も弱いつまらぬものだと思つた。山紫水明の日本から行つて黃塵萬丈、山あれど樹なく河あれば水の濁れる支那を見、且つ、四百餘州經綸の抱負を胸に懷いて支那へ渡つた元氣滿てる青年の身であつて見れば、支那に對する第一印象は右の如くであるといふことも、今から考へても決して不自然とは思はれない。

それから支那にゐて支那語を習ひ支那のことを勉强し、並に、支那各地を旅行して山川風物に親しみ、支那人と交つてその人をそらさぬ溫容に接し、今度は、第一印象とは反對に支那は無暗に好きになつた。支那各地を巡り歩き山に登り寺に憩ひなどして見ると大陸の山水はたまらなくいゝし、また、支那人と文學を語り美術を談じ、村の人々と世間話しをしたり、ませた子供を對手に遊んだりしてゐると、大陸の味もよく、支那人も親しむべく、支那は益々好きになり、支那でなくては夜も明けぬといふほどにもなる。支那文學に親しみ唐宋の詩文などを愛唱して支那の山水に接し支那の人々と交つてゐると特にこの感が深かつた。之は對支印象の第二期である。

然し、もう一歩踏み出して今度は支那人を相手に仕事をする身になつて、時には互に利害相反する環境に立つて支那人と接して見、または理窟も言ひ議論も鬪はして見た。而して一方支那の歷史を讀み小說を讀みさうして仔細に支那の社會を眺めて見た。そこに今まで表から眺め

てゐた支那とは全く異つた支那、異つた支那人を發見した。支那人の心の計り知るべからざる、而してその度し難く侮り難く一筋縄で行かざる性格に打ち當つて、今更ながら慄然とした。更に、支那の社會の暗黑面を眺め、その社會に覆面して巧みに泳いでゐる支那の人々を眺めて見ると、之は全く私共の世界とは違ふ世界だと感じた。蓋を開けて底を見、そこにとぐろを卷いて蟠つてゐる魑魅魍魎を見た感じ、その侮り難く度し難きを見、之等の人々を隣人に持ち、これらの人々を相手として行かなければならない我等の仕事の生易しいものでないと感じた。この時、支那及び支那人が厭になる。之は對支印象の第三段階である。

然し又、それをも乘り越して、支那の社會の表も眺め裏も見、色々な支那人とも交つて見ると、支那といふものは美しと見れば限りもなく美しく醜しと見ればまた限りもなく醜く、之を有象と見れば美醜善惡共に存し、之を無象と見れば美もなく醜もなく善惡共に象なきを感ずる。「大道廢れて仁義あり」と曰はれ、又、「天の蒼々たるは其れ正色か」とも謂はれる。支那の實社會を眺めつゝ之等古人の言を味へば、信にその味の深きを感じ、凡ゆる味を含み而して凡ゆる味をなくした無味の有味と支那の社會を觀ずる。

こゝまで來て見れば、曾つて支那組し易しと考へたことも誤りであり、また大道行はれる仁義の國と考へることの尙一層の誤りであることも分り、支那の美しきも醜きも支那人の溫柔も陰險も盾の兩面であると共に觀者の反映でもあることも分る。それほど支那の社會といふものは複雜至極であり、一寸ぐらひ觸つて見て分るやうな簡單なものではない。故に、支那では昔から政治家が醫者に例へられ、醫者も政治家も共に國手と謂はれる。先づ其の社會を診斷して誤りなきに非ざれば之を治めて效あるわけはないからである。支那人同士に於てさへ然り、況んや異民族との關係に於ておやである。支那人に對する政策、支那に對する外交の難しさはここにある。

明治二十七年六月二十五日、東京駐劄露國公使ヒトロヴオは陸奥外相に面會を求め朝鮮問題に對する日支間の紛爭調停の申出を爲した。之に對し、陸奥宗光は、支那の外交に反覆表裏多くして信賴しがたきことを指摘して之に應ぜず、斷乎としてその所信に邁信し、以てその效を收めた。曾つて外務省の門を入り陸奥宗光の銅像を仰ぎ見るごとに、私は、あの沈痛な面持に泰山搖ぐとも輕動せざる落着きを見、如何にも後輩に國家外交の大道を敎ふるものあるかを感

じたのであつた。今や、陸奥の銅像無し。然し、其の陸奥の精神は永久に我が外交の指針たらしめたいものと思ふ。

昭和十二年七月七日、支那事變勃發と同時に、私は、之は容易ならざる事體となると感じた。永い間支那革命の進展、支那民族の動向を觀察し、殊に滿洲事變後の動きを見て居れば遂に來るべきものが來たと考へざるを得なかつたのである。それは民族的對峙といふ樣相に於て從來の日支紛爭とは甚しく形を異にするものであると感じた。このことは、縱ひ蔣介石政府が地方政權に轉落し、汪兆銘氏の南京政府が出來た今日に於ても、少しも解消されてゐないのである。形は異り表面の樣相を異にするとしても、支那の民族主義的革命は、寧ろ、逞しき力を以て前進しつゝあるを見る。柔よく剛を制すとも謂はれる支那の社會は一面武斷政治の效果的に行はれる社會であると同時に、他面また柔を以て剛を制する策略の實に巧みに行はれる社會でもある。這間の消息は見えないものには見えないかも知れないけれども見えるものにはよく見える筈のものである。私は、事變勃發以來、機會あるごとに出來得る限り支那の實狀を紹介するに努め、また支那に關する私の所見を公にした。それは私にとつては言論動員に應ずる氣持でもあつた。三十年間國家の恩命を蒙り支那に於て働き支那及び支那人を研究して來た私としては、さうすることが一つの義務でもありまた報國の道でもあると考へたからである。爾來諸雜誌その他に於て發表した私の所見は、一應之を纏めて、昭和十三年「日支の將來」と題して中央公論社より、昭和十八年「支那の現實と理想」と題して今日の問題社より刊行した。然るに、今回また北光書房より私の所論を纏めて刊行したいと相談があつたので、茲に其の後の諸稿その他を纏め「支那と蒙古」と題して出版することゝした。

蒙古及び蒙古人は支那及び支那人とは全くその趣を異にする。蒙古の自然は支那とは全く異り、又蒙古人は支那人とは全然その性格を異にする。從つて支那を以て蒙古を律する譯にはいかない。蒙古に永くゐて蒙古人と交はつてゐると、その單純にして怒り易く、如何に多くの點に於て我々と似てゐるかを感ずる。純正蒙古人の社會へ入つて見ると、そこに我等の社會と同じものを多々見受ける。之は支那人社會に於ては感じ得ないところのものである。私共は蒙古及び蒙古人を考へるに就いては、支那とは異つた觀點に立つて考へる必要がある。

私は、大正元年蒙古に旅行して初めて蒙古について興味を覺え、それから昭和八年から十一

年まで滿洲國海拉爾にゐて、機會あるごとに蒙古を旅行し蒙古人と交はり、つぶさに蒙古の自然と蒙古人の社會とを身に體驗した。その見聞所得は「蒙古風土記」及び「蒙古草原」と題して改造社から出版し、また、私の蒙古に關する所論は「蒙古の理想」と題して同じく改造社から出版した。更に、私の蒙古に於ける實地體驗に基いて蒙古全般を概觀し、之を「蒙古及び蒙古人」と題して本年七月目黑書房から出版した。私の蒙古に關する所見は大體以上諸書に述べてゐるが、それに編述しなかつたもの並にその後の所論を併せて本書に採錄した。

支那と蒙古とは、私共の隣國であり、我々の好むと好まざるとに拘らず之を離れることも出來ず又これを遠ざくることも出來ない現實の國々である。之との接觸を誤ればそれは直に我が民族の生存にも影響する。孔子が仁義道德を說いて二千年、その孔子の道が現實に於ては殆ど顧みられない支那である。その支那及び支那人を包容して東亞は前進しなければならないのである。東亞の前進は我等にとつて決して生易しいものでないことを感ずる。

昭和十八年七月二十五日

米內山庸夫

目次

序……一
目次……一

第一編　支那

一、事變の將來……二
（一）大東亞戰爭と事變の將來……二
（二）支那問題の底流……三六
（三）對支政策の展望……四九

(四) 支那革命の前進……五七
(五) 支那革命の方向……八〇
(六) 日支關係の躍進……九六
二、支那と共産黨……一一九
(一) 事變の發展と共産黨……一一九
(二) 蔣介石と共産黨……一三三
三、重慶政權とその環境……一四四
(一) 重慶政權と列國……一四四
(二) 重慶の裏口……一五七
(三) 四川祕境記……一六七
(四) 四川の資源……一八三
四、支那民族の將來……一九八

(一) 支那民族の將來……一九八
(二) 支那民族の悠久性……二三四
(三) 張騫の西征と支那民族性……二四二
五、支那隨筆……二六六
(一) 情報……二六六
(二) 支那的凄味……二七五
(三) 會館……二八三
(四) 敬稱……二九〇
(五) 百碗の料理……二九三
(六) 支那の燒物……三〇三
(七) 青磁と琉璃瓦……三〇七

第二編　蒙古

一、蒙古研究について……三一七
二、蒙古の將來……三三九
（一）蒙古の將來……三三九
（五）蒙古の大道……三四一
三、蒙古高原記……三五六
（一）蒙古高原……三五六
高原—西域—葱嶺—周圍の山嶽—パミール高原—崑崙山—喀喇と哈拉巴顏喀喇と積石山—カラコルム—崑崙山脈
（二）金……三九一
蒙古の金—阿爾泰山—喀圖山の金—アルチン・タツク—金沙江—金と銀
四、馴鹿オロチヨン……四〇五
狩獵民族—蒙古高原を行く—三河—大興安嶺—森林生活—馴鹿オロチヨン—馴鹿—馴鹿オロチヨンの生活—森林民族—オロチヨンと馴鹿
五、蒙古人の生活と民藝……四三四
蒙古人の生活—蒙古の民藝
六、草原の藝術……四四五
萬里の長城—雲岡の石佛—漢民族と北方民族

(二) 支那問題の底流

一

杉村陽太郎が、かつて、倫敦在勤中、ドーヴァー海峽を泳いで渡らうとした、私は、詳しいことは知らないけれども、さういふニュースが倫敦から傳へられたことがあつた。その時、私が思つたことは、誰か揚子江を泳いで渡らないかといふことであつた。大江は南北を中斷し、昔から天險越ゆべからずと稱せられてゐる。その大江を泳いで渡つたら愉快ではないかと思つたのである。私は、もつと早くから、海國日本の健兒誰か揚子江を泳いで渡るものはないかと思つてゐたのである。隗より始めよといつても、私は山國で育つて泳ぎは全く知らない。その代り脚は頗る健、かつて雲南から四川まで、あの山嶽重疊たる間を五十餘日もかゝつて歩いたさうして、その四川からの歸途、揚子江を下つて、誰かこの揚子江を泳いで渡らないかと思つたのであつた。漢口から對岸の武昌を望む。江水滔々と矢の如く流れてゐる。この處江幅四千三百尺、この黄濁の急流を拔手を切つて泳ぐも亦た快ならずやと思つたのである。南京から對岸の浦口まではこれより稍狹く、三千七百尺といはれる。之を泳いで渡つたならば昔から泳ぐものは魚であり人間は泳ぐものとは考へてゐない支那人をしてあつと云はせるものがあるであらうに。私は揚子江を下りながらこんなことを考へてゐた。それから、もう三十年になる。ドーヴァー海峽を泳がうとする人はあつても、揚子江を泳いで渡らうといふ人があつたといふことを聞かない。揚子江はドーヴァーの如く世界の晴れの舞臺でもないし、また、黄濁急流で且つ淡水なれば比重も輕いし、必ずしも海の如く行かないことは考へられるが、それよりも、更に揚子江の泳げないことは、誰がいふとなしに揚子江の流れは魔の流れだといふことが傳へられてゐることであつた。私が初めて上海へ行つたとき、あの狹い黄浦江でさへ、これへ這入ると足を取られるといつて誰も泳ぐものがなかつた。黄浦江で溺死したら死體が浮ばないとさへいはれた。さうしたことから見ると、更に揚子江は魔の河だといふことも考へられる。三峽で遭難した船の死人は百哩餘りも揚子江の底を流れて宜昌邊りへ來て初めて浮くといふことも聞

いたことがある。まことに、揚子江は魔の河たるを感ずる。

春、揚子江を溯れば、江畔の楊柳綠に江水渺茫として波も高からず、まことに畫中を行くが如く、春風胸にあたればうとうととして眠氣さへ催して來る。さうした肌ざはりのいゝ揚子江であるが、その揚子江が魔の河だといはれるのである。揚子江の水は滔々として東に流れてゐるが、その底流は或は時に逆流してゐるといふ。かうした事實は三峽内に於ては明かに認められる。江水洋々として緩く流れ或は時に停滯してゐるやうにも見えるが、しかし、それは表面だけで、その底流は極めて急速に滔々と晝夜を分たず流れてゐるのである。かうした事實は海潮の影響ある揚子江下流に於ても見られる。揚子江が輕々しく泳げないのも、表面は極めて穩かであるがその底には計り知られぬ氣味惡き流れがあるためではないか。このことは推して支那民族についても考へられぬであらうか。

二

支那問題を考へるについて、第一に必要なことは、現實を摑むことであると思ふ。現實を摑んで思索し、思索して而して行ふべきである。現實に據らざる思索は、縱ひそれは如何に哲學的、論理的であつても、畢竟、教室内のものである。或は學生を教ふるには足らん、しかし、民を導くことは出來ない。更に、現實に基いて思索せざる建設に至つては、それは、恰も沙上の樓閣の如く、底無しの桶に水を注ぐが如く、造つても崩れ、注いでも注いでも消えて行く。よく支那問題の解決難がいはれるが、それは問題の解決が困難なのではなく問題の現實を突きつめることが困難なのである。現實を突きつめずして解決を急ぐ。さらに困難を增す所以である。治水の要は導くにあり、導くためには先づ流れを知ることが必要である。流れを知らずして導けば治者は右を指しても流れはそつぽ向いて左を行く。而してその流れには表流あり底流あり、眞流を知ることの難、烏の雌雄を知るよりも難しといふべきである。

張學良が楊宇霆を麻雀に招んだ。楊宇霆はその席で殺された。徐樹錚が陸建章に一寸來て呉れといつた。陸建章は倉皇として徐樹錚を訪ねてその應接間で殺された。殺すために呼ぶのであるが、呼ばれるものは之を悟らず、夏の蟲の飛んで火に入るが如く、自ら死地に赴くのである。幡隨院長兵衛は殺されることは承知で水野の邸に赴いたのであるが、それは男の意地であ

り、さうして日本人の特性を現したものである。支那にかういふ行き方はない。殺されると分つたら寧ろ逃げる。支那にはかうした例が數知れずある。支那人でさへ支那人を知ることの如何に難しきかを知るべきである。支那問題はこの支那民族に對する問題であり、支那民族を知ることの難しさは、また、支那問題解決の難しさである。自ら穴を掘る。さうして、その穴に向つて坐つて首を斬られる。首はその穴の中に入る。かうしたことを平然としてやつてのける支那人である。神經無しといふべきか神經無限に大なりといふべきか、之を知るに苦しむのである。有無相通ずといふ。之を一箇の輪とすれば無の極は有の極であり、無卽ち有である。支那人の首の穴に落ちる音を察しながら私は眼をつぶつてかう考へたことがある。それは亦た支那民族の一面でもある。支那人を知ることは生易しいことではないのである。

三

先づ支那を見て來給へといふ。見て來るといふ。見て來てさうして案を立てる。この人は果して何を見て來たであらうか。揚子江の水が東に流れてゐることを見ることは誰にでも出來る。しかし、その揚子江の底流を見極めることは必ずしも誰にでも出來ない。支那を廻つて支那の表面あるがまゝを見る。支那人に會つて支那人の云ふことをそのまゝ聞く。それが支那であり支那人であると思ふ。さう考へさうして案を立てる。危險之に過ぎたるはない。それは揚子江を泳ぎまたは張學良から麻雀に呼ばれると同じく危險である。動もすれば揚子江の底の逆流に足をとられ麻雀半ばにして射たれるかも知れない。一年にして片附くものと思つた支那問題が五年經つても未だ片附かず更に何年かゝるか見透しがつかないなどゝいふことが假りにあるとすれば、それは表から見た支那を眞實の支那と思ひ支那人の云ふ言葉をそのまゝ誠實と信んじて處理するためとも考へられる。しかし、支那問題は永久の問題である。支那の國は或は滅ぶことがあつても支那民族は決して滅びないといはれる。支那問題は畢竟支那民族を對手とするものであり、卽ち、永久の問題たる所以である。支那問題未解決の五年はその問題の悠久たるに比すれば僅か一瞬に過ぎないものであるかも知れない。支那問題を考へ支那問題の解決を圖ることは寧ろこれからである。將來支那問題解決の時期は必ず來る。しかし、それには迎へが必要である。その迎へは、支那の現實を摑み現實に基いて思索するといふことである。學

者は教室に引つ込み百姓は野良に出で働く。そこにやはり大自然の眞理がある。しからば、支那の現實とは何か。

四

獨逸はその戰爭目的を獨逸民族の生きんがためといつてゐる。戰ふ所以も進む目標もよく分るし又分らせることも出來る。英米兩國が聯合してゐるのもその國を見ればこそ聯合であるけれども、民族的に見ればアングロサクソンの一民族である。ソ聯が世界の人々の豫期に反して頑張つてゐるが、それはやはりロシア系諸民族が興亡を賭して團結してゐる結果と見られてゐる。一寸の蟲にも五分の魂といはれ、民族生存の意識は諸民族共通のものであり、秩序ある世界に於てこそ其處に自制謙讓の倫理も成立つけれども、秩序決潰の世界に於ては各々その生存意慾を露骨に現して血みどろとなつて相爭ふ。所謂食ふか食はれるかの鬪爭である。野獸は森林に於て嚙み合ひ原始民族は各々その部落を率ゐて相鬪ふ。人類に文明が發足してから幾千年經つか知らないが、現在の歐洲戰場を見れば、全く食ふか食はれるかの民族的原始爭鬪の修羅場を打ち擴げてゐるのを感ずる。弱小民族は鳴をひそめ强大民族は血鬪する。全く民族對峙の現實である。

かう考へて見ると、世界現實の一面は民族の對峙たることが感じられる。フランス民族が押へられつゝも反抗し所謂叛亂部隊の出現となるのも押へ切れぬ民族意識の發露であると思はれる。更に、世界現實の他の一面は隣人相愛せざるの場面である。家族主義の東洋君子國に於てこそ隣人相愛する世界は存在するけれども、個人主義の西洋的社會に於ては隣人相愛せず寧ろ愛は遠く離れて存在する。個人主義の社會に於ては利害を主とし、相隣りせば利害の衝突多く遠隔の地に於ては利害の衝突が少いからである。家族主義の社會に於てさへ、時時會へば親しく、常に共に在れば兄弟喧嘩もするといはれる。隣人相愛するは理想であるが、世界の現實は反つて隣人相愛せざるにある。歐洲に於ける獨佛兩國の鬪爭史を見ればこの點極めて明瞭であるし、また、英獨相爭ふも獨ソ相爭ふも、國相隣りし利害相衝突するためである。第一次世界大戰後に於てこそ所謂デモクラシーの理想は叫ばれたけれども、戰爭そのものは決してデモクラシーのために戰はれたものと云はれなかつた。勝つてこそ理想は權威と光輝とを以て現れる

が、戰は生存のためであり、先づ勝つことを必要とする。勝たずしては理想も何もない。獨逸はこの點を極めて明瞭にしてゐる。卽ち、獨逸は獨逸民族生存のために戰つてゐると。更に顧みて支那問題を考へて見る。

五

支那事變が勃發したとき、卽戰卽決だ、事變は一年で片附く、南京を占領したらそれで終りだ、と多くの人々に依つて考へられた。日清戰爭は略ぼ一年で片附き、日露の大戰爭でさへ一年半で終りとなつた。支那事變は一年で片附けよう、また、片附くと考へたことも無理のないことであつた。しかし、當時、私は、南京を占領しても片附かない、事變は永引くといつた。何故なれば、日清戰爭、日露戰爭は國と國との戰爭であつたけれども、支那事變は、その性格に於て、民族鬪爭の形を以て現れたからである。事變の直接誘因は國民黨の排日であり、國民黨の排日は三民主義中の民族主義に立脚するものであることはいふまでもない。かつて日本と結んで排英を策し、漢口九江の英租界を强制回收したのも、さらに一轉して英米援助の下に日本に當つたのも、要するに、異工同曲の一貫した國權恢復、各個擊破の運動である。而して、支那に於ける國權恢復運動は民族主義を根抵とするものであることは特に言ふまでもない。このことは孫文も三民主義綱要中に於て明確に言つてゐる。蔣介石の新生活運動も支那の國權恢復は先づ第一に支那が强くなることであり支那が强くなりさへすれば凡て求むるものは與へらるべしといふ理念の下に發足してゐる。その基礎は同じく三民主義にあり、卽ち、三民主義の實踐運動に過ぎない。さうしてその最も强く現れてゐるのは民族主義の實踐である。

近代支那の政治的性格は、國內的には武力統一、對外的には國權恢復、この二つの思想が色々の形に於て現れてゐるものである。民國革命の當初に於てこそ民權が叫ばれ國會開設、憲法制定が進行する形を呈してゐたけれども、舊軍閥の武力鬪爭はさうした空想的民權運動を悉く粉碎してしまつた。孫文は口を酸くして三民主義を叫んでゐたけれども、たゞ民族主義のみ昂揚され、民權、民生共に寂然たるを見るのみであつた。故に、孫文は、革命仍ほ未だ成らずと悲壯な言葉を殘して死んで行つた。孫文の死後、新軍閥の擡頭は舊軍閥割據の狀態と何等異るなく、國內は全く武力抗爭の形を示してゐた。蔣介石でさへ、事變前はその威力江南四省以外

には餘り及んでゐなかつたのである。その蔣介石に曲りなりにも國內統一の形を齎したものは民族主義に基く對外一致の態勢であつた。而してその態勢は事變の勃發によつて層一層完成された。事變の原因は國民黨の排日にあり、排日は國權恢復運動の發現であり、而して國權恢復運動は三民主義中の民族主義に基礎を置く。卽ち事變は近代支那に澎湃として擡頭しつつある民族思想に根柢を持つものである。更に、重視すべきことは、事變によつて民族的對立は消滅せざるのみならず、重慶政權の行動を見れば却つて根强く惡性に增進されつゝあることである。この事實に目をつぶることは正に耳を掩ふて鈴を盜むに類するものである。日本民族の將來を思つて、我々は、このことを如實に見、さうして永遠の對策を考へなければならない。何故ならば、民族的對峙は永遠であり、支那民族は、かつて百餘年の歲月を費して蒙古民族を驅逐し、二百六十餘年の辛抱を以て遂に滿洲民族を民族的に滅ばした歷史を持つてゐる。歷史は繰返すともいはれる。その繰返す所の歷史は日本民族に關したものであつては絕對にいけないのである。それがためには、何よりも先づ日支兩民族の對峙といふ事實を有りのまゝに認めることが必要である。己れの好まざるものに目をつぶれば唯だ空想するに過ぎないであらうし、臭いものに蓋すれば臭みは却つて消散しないであらう。寧ろ、解決の道は正直に物事を認めることにある。さうして百姓が土壤の性質に從つて種子を選んで蒔くが如く、現實に則して思索し、思索して而して施すことが必要である。

支那に於ては、かつては、決して今日の如く民族主義的思想が橫溢してゐなかつた。日支兩民族は互に相隣りし極めて親善であつた。それは家族主義的東洋倫理が兩民族を共通に支配してゐたためであつた。しかるに、個人主義的西洋倫理が支那民族の間に齎らさるるに及んで、個人としては權利をいひ民族としては開放を叫ぶやうになつた。東洋の傳統を無視して個人主義的權利をいひ歷史を無視して徒に開放を叫ぶところに百弊簇り起り今日の狀態となつた。しかして、今にして仍ほ權利をいひ開放を叫ぶ。これは支那全般を通じての思想であり、而して、民族の存する限り止むことがないであらう。

以上述べた通り、現在世界の情勢は、民族相嚙み隣人相愛せざる形の下にあり、弱小民族は物言はず、强大民族は互に食ふか食はれるかの血みどろの鬪爭を續けてゐるのである。それは一つの文明の斷末魔とも考へられる。何故なれば、今日の如く、戰爭の形を總力戰的形態に持

ち來らしめたものは武器の發達であり、武器の發達は科學の進歩に基き、而して科學の進歩は文明の所産である。文明は自ら期せずして人類の進歩と人類の壞滅とを並び齎らしてゐるのである。或は之は現代のノアの洪水であるかも知れない。唯だ勝ち殘つた民族のみ將來の世界に榮えるであらう。故に今や我が民族は何事を置いても先づ第一に勝たねばならぬ。こゝに於て、再び支那問題を考へて見る。右の如く、今日に於ける民族對峙の世界的情勢、總力戰的戰爭の形態の下に深く支那問題の根柢を檢討して見るならば、我々は亦たそこから民族問題を抹消し去ることは出來ない。却つて、支那問題の根柢に蟠つてゐるものは民族問題たることを感ずるであらう。揚子江の水の晝夜を舍かず流れるが如く、そこに住む四億の支那民族は生きる道を求めて流れてゐる。時に逆卷くことはあつても時に靜かなることがあつても生きんがために流れてゐることには變りはない。抗戰救國といひ和平救國といふ。要するに、たゞ道を異にするのみで進み行く目標は一點である。目的を達すれば抗戰も和平も一點に集まるといふところに極めて不思議な民族的倫理性を持つてゐる。この點を凝視するならば、我々は支那問題の底流には果して何が流れてゐるかを知ることが出來るであらう。

(三) 對支政策の展望

一

世界に、如何なる國にとつても何處の民族にとつても、無關心でゐられない國と民族とがありとすれば、それは支那と支那民族であらう。面積約一千萬平方キロといふ我國內地の約三十倍、世界全地域の約十分の一、殆ど歐洲全土に匹敵する土地と、人口約四億五千萬といひ、殆んど全世界の人口の約五分の一を擁する支那及び支那民族は、何といつても世界一の驚異的存在である。

しかも、その國土は溫熱兩帶に亘り、氣候溫暖地味豐沃にして、天惠の風土と無限の資源とを藏し、その國民は優秀なる文化と古き歷史とを誇り體質强健にして終日蜜蜂の如く働らく勤勉なる民族である。これは何うしても世界の人々の無關心でゐられない土地と民族である。こ

四、支那民族の將來

(一) 支那民族の將來

支那の强味

獨逸の强味は組織にあり、ソ聯の强味はその恐怖政治にありともいはれ、また、英國の强味は老大國としての鈍重にあり、米國の强味はその豐富な資力に物を言はせるにありとも考へられる。しからば支那の强味は何處にあるであらうか。

孫子は『知レ彼知レ己、百戰不レ殆、不レ知レ彼而知レ己、一勝一負、不レ知レ彼不レ知レ己、毎レ戰必殆』といつてゐる。固より彼を知らずして勝てるわけはなく、勝つてもそれは無我無中の勝である。彼を知るとしても、彼の弱を知るあり彼の强を知るあり、彼の弱を知るは勝つ所以であり、彼の强を知るは負けないためである。勝つて兜の緒をしめよともいふし、また、負けるは勝つともいはれる。勝つた彼岸にさらに一つの勝負のあることが言ひ現されてあり、負けても負けたその重石の下に於て勝利感を味ふといふ環境もあることが想像される。永遠の勝利の難しい所以である。

漢民族の力

滿洲族の清朝は支那を征服して二百六十餘年の天下を保つた。清朝は漢民族の弱を知つて之に勝ち之を征服した。しかし、漢民族の强味を知らず、永遠の勝利を贏ち得ずして滅んだ。さうして、その滅んだ跡に滿洲民族の姿は見えず、民族の滅亡ともいひ得べき荒凉悲慘なるありさまを示した。

乾隆皇帝はその晩年に於て上諭を以て滿洲人に對し漢人の文化を學ぶことなく滿洲固有の風習性格を維持すべきことを戒めた。その乾隆皇帝自身が漢人文化を愛しその一生の作詩二萬餘首に及ぶともいはれるほど立派な支那文化人であつたのであるからこれも一つの笑はれぬ悲劇

である。乾隆帝自身が自ら支那文化人となり支那文化に惑溺してその支那文化の底にとぐろを卷いて蟠まつてゐる漢民族の力を知つたのであらう。特に上諭を以て滿洲人を戒めたことを考へて見ると餘程帝の心にこたへたものがあつたのかも知れない。殊に我身に顧みて慄然としたのではなからうか。乾隆帝ほどの聰明な人が、自分の好んでやつてゐることを他人に爲す勿れといふのであるから、その體驗、餘程身に沁みたものでなければならない。しかし、一方、乾隆六十年間の治世は帝が支那文化人であつたためであるとも考へられ、支那文化の功罪相半ばするを思はしめるのであるが、何れにしても、乾隆帝はその晩年に於て、支那文化の他民族に及ぼす恐るべき力を知つたことは明かに想像される。しかし之れを悟つたときはもう遲かつた。滿洲人は上、皇帝から下、庶民に至るまで滔々として支那文化の中に浸つて居りもう如何ともすることが出來なかつた。この點、支那文化の力は阿片の毒にも似てゐる。

右の如く、乾隆皇帝は漢民族の力はその文化性にあると考へた。漢人の武力恐るゝに足らず、恐るべきはその文化性にあるとなしてゐるのである。支那全土を征服し全漢人を統治してゐる清朝の皇帝としてはさう考へるのは當然とも思はれる。土地と人民はすでに完全にその治下に入つてゐたからである。しかし、支那全土を征服統治してゐない他の民族にして之を考へて見るならば、そのほかなほ別の考へ方もあるであらう。それは卽ち、その廣大なる土地とその極めて多數の人口、さうしてその多數の人口の更に夥しい增加力である

土地と人口

支那の廣大なる土地とその豐富なる人口についてはそれは餘りに明白であるためか却つて從來我國人には餘り注意されてゐないけれども、歐米人はこれに注意し支那の强味はその廣大なる土地と豐富なる人口にあるといつてゐる。歐米人の間に於てこの問題について考へられたことは固より今に始まつたことではない。かつて歐洲に於て黃禍論が唱へられた。それは黃色人種が將來世界を支配せんとすることを危惧したものであり、一の妄想として葬り去られたけれども、しかし、黃禍を武力戰と考へればこそ或は妄想であるとしたものであるかも知れないが、生活戰として見れば必ずしもしかく簡單に笑殺が出來ないものがあつたのであらう。歐洲勢力が東漸し、かつては香港、マレー、印度支那、南洋諸島をその手に收め、恰も亞細亞の一角を

支配するの觀を呈してゐた。しかし、仔細に之を見るならば、歐洲人の支配開拓と同時にそこに逆に這入つて來る支那民族の勢力を、彼等白人は何うすることも出來なかつたのである。故に、政治的には歐洲人が支配してゐたけれども經濟的には支那人に支配せられてゐたとさへいはれた。この名を捨てゝ實を取る粘り强き支那民族、その支那民族の撓まざる進出。彼等白人の恐れたものは決して支那の武力にあらずこの支那民族の經濟的進出であつた。それは生活戰線への直接の進擊であるからである。世界に擴がつた猶太人が資本主義的經濟の基礎を造つて今日の世界戰爭の端を開いたともいはれてゐる。黃禍といひ猶太禍といふ。決して武力禍をいふのでなくその生活に對する進出、精神への進出が恐れられてゐるものである。故に米國は支那人の入國を制限し、獨逸は猶太人を國外に放逐した。歐洲人が東漸して亞細亞の一角を占領し、或は支那の一部を支配するに及び、その開拓に際して必要に迫られて支那人を招きこれを利用する政策をとつた。開拓が成つて見ると、そこに入れた支那人が固く根を張つて、もう何うにもならなかつた。その根强い支那民族の進出力には恐らくは驚嘆するよりほかなかつたであらう。故に、彼等白人は、支那の恐るべきは武力にあらず、その廣大なる土地と多數の人口であるといつてゐるのである。

廣大なる土地、多數の人口、それから支那文化、この三つのものを私は支那の强味として拾つて見た。支那を侵略しようとして遙々と西からやつて來た歐羅巴人は、支那の土地の廣大とその人口の饒多とに出會つて手を燒いたし、支那文化の阿片味的性質は、支那及び支那民族を征服した乾隆皇帝をして遂にS・O・Sの信號を揭げしめた。征服するも難、征服して同化するも亦た難、この征服難と同化難の土地及び民族たる支那及び支那人、それは私共と同じく東亞の國、東亞の民族たるを思へば、私共も決してこの事實に無關心たることが出來ないのである。私は次に之等の事實について考へて見たい。

大陸の廣さ

私は、かつて、日本から上海に行くとき、同鄕の者から滿洲にゐる人に言傳を賴まれたことがある。それはもう餘程前のことではあるとしても、日本人の支那大陸に關する知識は、私共の時代になつてからでさへも、さういふ時期が相當つゞいてゐたのである。滿洲事變後の滿洲、

支那事變後の北支、中支など、すでに我々日本人の常識となり、今では、上海と滿洲が東京と横濱ほどに考へられたことが一つの笑話として殘るありさまになつたとしても、しかし、まだ〳〵、支那大陸の奥地のことを考へるならば果して之れを笑へるであらうか。上海から南京、南京から漢口と口輕にいはれる。上海から漢口まですぐだと思つて行つたら其の間六百哩もあるといつて且つ驚き且つ大發見したやうな顏をして歸つて來た人があつた。すべて人間は自分及び自分の周圍を基準として物を考へる原始性を持つてゐる。雨量を指一本二本と計り、水の深さを一尋二尋といひ、樹の太さを一抱へ二抱へといふ。井底の蛙大海を知らずといふが、しかし、大海は知らなくても井底はよく知つてゐる。大海を知らないことは罪でなく、知らぬ大海を井底の尺度で計るところに罪があるのである。我々は支那及び支那人を知らないことは罪ではない。その知らぬ支那及び支那人を日本及び日本人の尺度で計ることが間違の元である。

更に、漢口から宜昌、宜昌から重慶といふ。しかし漢口から宜昌まで約四百哩、宜昌から重慶まで約三百五十哩とまで考へる人は少い。漢口から重慶まで約七百五十哩、さうして其の間に三峽の險と大巴山脈の峻峯が連亙してゐる。湖北、四川の境に横はる偉大なる山嶽は四川の天然の城壁を成し三峽はその關門をなす。且つ一口に四川といつても、その四川は、面積ほゞ我國全土に等しく、人口五千餘萬といはれる。しかも、その五千萬の人間がそこに自給自足が出來るといふところに四川の特徴がある。重慶を考へ四川を考へるとしても、この山川の形勢、土地の廣大さが、目をつぶれば頭に浮んで來るほどの認識がなければ之に對して誤りなき對策が考へられぬであらう。支那大陸の廣大さにはかういふ一面もある。

支那の土地の廣大なることは、その國力を見る上に於て二つの點から考へられる。その一は消極的力で卽ち外國若くは異民族の侵略に對する防禦力をなすものであり、その二は積極的力で卽ち支那の國力發展の基礎をなすものである。蜿蜒と連なる山嶽は一の防塞をなすものたることは言ふまでもなく、かつて支那民族は陰山々脈に沿うて萬里の長城を築いて北方民族に對する防塞とした。四川へ行けば山上によく城砦を見る。巖壁峭立するその山の頂上に堅固な城砦を築いてゐる所謂山寨である。しかもこの山寨は土匪山賊の籠るところではなくてその土匪山賊の難を避けて良民の籠るものたるところに特徴を持つてゐる。一豪族にして自ら一山寨を持つてゐるものもある。萬縣の賀淑甫一族の天生寨の如きこれである。山上に泉あり終年涸れ

す、土地あり耕して食糧を得、食物を貯藏し兵を養つてそこに籠つてゐるのである。この城砦を造つて籠るといふことが支那の一つの姿である。支那の家屋は四壁を高くし入口を少くし、その構造すべて防禦を主として發達して來たものであり、また、純支那風の市街所謂支那街は、その街道を殊更に狹くし、ところ〴〵に柵を設けなどしてゐる。これ亦た防禦を主として構築されたものであることは明かである。更に、村落、都市共に多く城壁を以て圍み、城門を少くして以て敵の襲擊に備へ、更にまた、國としては萬里の長城、柳條邊牆などを築いてその守勢を整へてゐたこともある。かくの如く、個人の家屋から國家の國土に至るまで、支那に於ては、昔から守るといふことが發達しそれが習性をなしてゐる。しかして、支那の守勢は單なる籠城ではなく、籠城しつゝそこで延びんとするものである。天生寨の如き山寨に於てさへ自給自足の出來る狀態であり、その他都市としても國としても廣大豐沃なる土地を有して自給自足しつつ生き延びて行き得るところに支那國土の特徴がある。四川を見ればその然る所以がよく分る。四周山嶽に取り圍まれて天然の一大城砦をなし、しかして內に廣大なる沃野を抱へ、米を產し鹽を產しその他殆んど物として產せざるなく、よく自ら五千萬の人口を養ふに足る。防禦し而してその中にあつて永く生き延び得る土地である。その土地の廣大とその廣大なる土地を圍繞して連亙する山嶽とは一つの大なる防禦力を形造つてゐるのである。さらに私共は支那大陸の一特徴としてその大平原を考へて見る必要がある。

大平原

支那の大平原は支那民族の存在に關して二つの力を持つてゐる。一は他民族の進出を禦ぐ力であり、二は支那民族の繁榮不滅を齎らす力である。我が關東平野を見てゐる眼で以て支那大陸の大平原を考へるならば盆景をそのまゝ大自然の山水と考へるほど滑稽なことであらう。北京から京漢線で南に下ると、右はほゞ大行山脈に沿うて行くが、左は一望無涯の平原でその平原は北京から約五百哩もつゞく。廣東省の珠江デルタに於ては水道が網の目の如く廣がり、米作二回、養蠶八回といふ豐沃なる土地を抱え、そこに三千萬の人間を包容してゐる。西北乾燥地帶に至れば廣袤幾萬平方哩にも亙るほどの大草原と無水不毛の沙漠とを廣げてゐるのを見る。大平原はそこに住んでゐるものから見れば或は肥沃の耕地であり、或は遊牧の草原であるけれ

ども、新たにこゝに進出して行く他民族から見れば或は寧ろ難物であるかも知れない。支那大陸ほどの廣大にして人口夥多なる地域に於ては、その人民を支配せずしては土地を支配することは不可能である。さうして、また、その人民を支配するにはその地域は餘りに廣大でありその人間は餘りにも夥多である。山嶽の圍繞するあれば國を建てるに都合よく、小國を建てその小國を單位として更に國を重ね擴めて行くことも出來るであらうが、支那大陸のやうな一望無際の大平原となれば、或る一つの限界をつくることが極めて困難であり、その無限の土地を有限に支配するといふ極めて困難な狀態に遭遇する。支那に於て昔から小國分離の狀態が永續しなかつたのは主としてこれがためであると思ふ。古來北方民族が屢々北支那各地に入つて國を建てた。それら北方民族の國はすべて跡方もなく消え失せた。それは無限の土地、無限の民族を有限に支配せんとすることの失敗であつたと思はれる。茫々たる廣野を行くといふ。規模を小さくして考へれば文學的にこそこの句を味ふことも出來るであらうが、支那大陸ほどの大廣野となれば、まことに、何處までつゞく泥濘ぞ、それは一つの行路難の表現である。支那は一面この大平原を以て國を守つてゐるともいへるのである。これは支那大平原の民族を守る上の

つの消極的力ともいへるであらう。

つぎに、その大平原の積極的力を考へて見るとそれは物心二つの方面に於て支那民族の民族生活に影響を與へてゐることを見ることが出來る。心理的には支那人の悠々せまらざる自然に順應する氣持を持たしめたこと、物質的には豐富な物產を供與して支那民族の生活を潤澤にしたこと、この二つである。支那民族の民族性は、民族そのものの發祥と同じく、黃河流域に於て發達したものとも考へられる。恐らくは、漢民族が黃河流域を中心として民族生活を營んでゐた頃、その南北にゐた異民族は支那人とは異つた性格を持つてゐたであらうが、漢民族の膨脹とともにそれら諸民族は漢民族に同化し、性格的には全く漢民族と同じやうになつたものではなからうかと考へられる。南方の廣東人などの人種學的樣相とその民族的性格とを仔細に眺めてゐると、さういふことを想像もされるし、また北方に於て、現在蒙古人の漢人化して行く道程を目前の事實について見ると、明かに異民族を同化してそれに漢民族的性格を植付けて行く一道程を認めることが出來る。廣東人には廣東人的な性格があり、四川人にはまた四川人的な性格がある。それは共にそれら地方の自然的環境及び社會生活によつて齎らされたものでも

あらうが、しかし、その間に、四川にも廣東人にも一貫した共通の性格がある。それは全く支那人的のもので、支那民族の民族的性格の中心を爲すものであり、その性格は黄河流域に發生した大平原的のものであると考へられるのである。

漢民族の性格

民族的性格の發源としては自然的環境と社會生活との二つの方面を考へる必要があると思はれるが、こゝではたゞ、その自然的環境の一面として大陸大平原の支那民族の民族的性格造成に影響したであらうと思はれる點について述べて見たい。それは、多くの支那人の性格を眺め、かつまた、私自身、大平原を旅し大平原に生活して見て考へたことである。

大陸の大平原を巡り歩いて氣のつくことは、その距離に對する錯覺である。遙か彼方の目標を眺めて五キロ位と思つたのが、實際歩いて見ると十キロもそれ以上もあつたといふことは私共のよく經驗することである。遠くのものが大きく見える。何うかすると地平線の涯に於て地平線から浮いて大きく見えることがある。かういふ現象は殊に揚子江上または蒙古高原地帶に於ては極めて目立つて現れる。大氣の密度による光線の屈折から起る一種の蜃氣樓的現象であらうが、大陸にはかういふ遠くのものが近く見え大きく見えるといふ特徴がある。大陸の大平原はときに殆んど涯しなしとも思はれるほど廣い上に、物體が近く見えるといふ性質を持つてゐるのである。その大平原に支那民族が發生し、そこに生活して來たと想像する。さうして、山嶽の錯綜する彈丸黑子の島國に生れ、そこに育つて來た日本人と比べて考へて見る。山を目がけて行つて一氣に山へ行きつけると思ふのが日本人の常識である。故に一氣呵成ともいひ、卽戰卽決、當つて碎けろなどゝいふ。かういふ氣持は確かに日本人的である。日本で育てば誰でもさういふ氣持になる。しかるに大陸の自然は遙かにこれと異なる。大平原の彼方に山が見えるとしても、その山は前に述べたやうに錯覺で實際よりも近く見えてゐるのである。山を目がけて行けば山も彼方へ行く。しかも涯しなき大平原の廣さに、山を目がけて焦り行けば行き着かぬうちに心が疲れる。山を目がけて行けば山も彼方へ行くと考へるのが支那人の常識である。そこに日本人と支那人との間に物の考へ方が違つて來る。一氣に山へ行きつけると考へるところに山嶽征服などゝいふ物を克服して感ずる勝利感が養はれるであらうし、一氣に山へ行

きつけるものでないと考へるところに自然に順應して悠々せまらず、勝つといふことを目指すよりも負けないといふことを考へる氣持が生れるのであらう。支那人は山嶽を征服せずして山嶽に祈り、自然に齒向かはずして自然に順應し、氣に喰はぬ風があつてもこれに逆らはず、柳らの枝に雪折れのなき如く、逆らつて倒れることなく生き永らへんとするのである。自然に逆はざるはその天地の悠久なるよりももつと悠久に生きんとするものであり、ときに異民族の侵略壓迫に逆らはざるはその異民族よりももつと悠久に生存せんとするものである。こゝに支那の大平原によつて養はれた一つの民族的性格を見得るのである。

支那の强味の一つとしてその國土の廣大を擧げてゐることは前に述べたが、その國土の單に大なるのみならず、さらに豐沃なることを考へて見るならば、一層、その支那の强味たる所以を知ることが出來るであらう。支那は廣大にして豐沃、天產豐富にして物として產せざるなしといはれる。北方民族が氣候寒烈なる乾燥草原と不毛の沙漠の中に苦鬪の生活をつゞけ、南方民族が暑熱瘴癘の中に餘り働かずして生きる懶惰の生活をしてゐる間に、支那民族は氣候溫暖、地味豐沃の地に於て衣食足り且つ餘りある生活をつゞけて來た　衣食足らざればこそ人間は食ふために營々として他を顧みる餘裕がないかも知れないが、衣食足れば禮節を知り、文化的生活はこゝに發達して來る。支那民族がその四圍の諸民族に比べて優れた文化を持つて進んで來たのは主としてこの豐沃なる大平原に衣食足るの生活をして來たためであらうとも考へられる。卽ち、支那の强味たる廣大なる土地は、單に廣大なるのみならず、廣大肥沃にしてそこに極めて多數の人口を養ひ、且つそこに優れた文化を發生せしめたことに意味を持つてゐるのである。こゝに於て、その大平原に發達した多數の人口とそこに發生した文化、所謂支那文化とを考へて見る必要がある。

人口の豐富

土地の廣大と人口の豐富、地理的にいへば面積約四百萬平方哩、人口約四億五千萬、これが支那の一面の强味だといはれる。しかも、これを支那民族の强味として見るならば、それは恐らくは永久に變化しないであらうといふところに特徵を持つてゐるのである。組織が破壞せられたときその强味を失ひ、精神的强味はその精神が頽廢したときそれを失ふ。老大國も朽ちれ

ば脆く、物資豐富といつても用ふれば盡きる。しかるに土地の廣大と人口の豐富とは、殖えることこそあれ盡きることはなく、次第に强味を增しこそすれ弱まることはないのである。これを國として見ればこそ、時に國土の分割あり或はその覆滅あり、國土必ずしも不變とはいはれないけれども、これを支那民族の土地として見れば、その土地に少しの減少もなく、却つて他民族の土地を侵蝕して次第に擴張しつゝあるを見るのである。支那民族はその周邊の地に於てはそこに進出して土地を耕し先住民族を或は驅逐し或は同化してその土地を擴げ、遠隔の地に於ては同族相集まつて所謂支那街を造る。かうした例を私共は隣接地區たる滿洲、蒙古は勿論、南洋その他世界中至るところに見ることが出來る。他民族を同化こそすれ他民族に同化せず、類を以て集まり、土地に執着して離れず、ジリ〳〵と押し廣がつて行くのである。これは無論中華民國の國土の擴張ではないけれども、一の支那民族の土地の擴大であることは確かである。それは動もすれば忘れられがちであるけれども、支那民族の增殖につれて支那民族の土地が漸次擴大しつゝあることに注意することが必要である。滿洲三千萬といはれた人口は四千餘萬に增加したことは、滿洲建國後の繁榮を見る所以であり一面欣ぶべきことであるかも知れないけれども、他面その增加が假りに支那人入滿の增加であるとすれば、果してそれは欣ぶべきものであるか何うか。元朝が支那全土を支配しながら僅か百餘年にして滅んだのは、その土地を支配し得たけれども民族を完全に支配し得なかつたゝめであり、清朝が二百六十餘年の壽命を保つたのは、土地と共に支那民族をも支配し得た爲めである。しかし支那民族を支配し得た筈の清朝は、何時の間にか却つてその支那民族より支配される形となり、恰も尻無し河の沙漠の中に入つて影を沒する如く、滿洲民族も支那民族の中に入つて影も形もなくしたのである。支那民族を完全に支配することは自ら支那民族に同化することを必要とするものであることを、滿洲民族は民族滅亡の悲慘なる史實を以て實證したのである。支那の國土は支那民族の土地といふ意味に於て不變不弱の强味を持つてゐるものであり、支那民族は同じくその計り知るべからざる增殖力と逞しき生存力とを持つてゐることに於て、是れ亦た永遠不滅の强味を有するものである。

其の同化力

支那の人口は或は四億といはれ或は四億五千萬といはれ、統計は不充分であり、また支那に於ける發表もまち〳〵であるが、少くとも四億と見ることは常識となつてゐる。こゝで私のいひたいことは、支那の將來を考へるに際して、その對象となるべきものは中華民國の人口ではなくて支那民族の數たるべきことである。支那の將來は要するに支那民族の將來であり、支那民族は單に中華民國内に限らず、その他の各地に集團的に存在してゐるといふ事實を忘れてはならないのである。支那人は支那人部落を造り或は支那街を形成して集團的に存在する場合は、縱ひ他民族の中にあつても、また如何なる環境の下に於ても容易に他民族に同化しない。動もすれば逆に他民族をその中に引き摺り込んでしまふ。中華民國の中に居る支那人及びその國外にゐる多數の支那人、これは一括して支那民族の民族力をなすものである。

支那の強味は屢々いふ如くその國土の廣大と人口の多數とであるが、しかも、その國土は廣大にして肥沃なることに特徴を持つて居り、人口は多數にして大體單一民族なるところに特徴を持つてゐる。印度は人口約三億、ソ聯は約一億三千萬、共に人口の多きをいはれるけれども、しかもその數は支那民族に及ばず、且つその民族的關係極めて複雜で、印度人或はソ聯國人であるとしても印度民族或はソ聯民族といはれるやうな單一民族でないところに弱點をもつてゐる。故に印度は政治的、宗教的に國内必ずしも一致せず、ソ聯は國内一致を求めるためには恐怖的政治をさへも必要とするのである。しかるに、支那はその四億餘萬の人口は殆んどすべてが單一民族であり、且つその民族が更に國外に數千萬といふ數を延び擴げてゐるのである。こゝで注意されることはこの四億數千萬といふ支那人は當初から單一民族として發生增殖して來たものか何うかといふことである。

支那南北を廻り歩いて仔細に支那人の人種的樣相を觀察するならば、そこにその風貌骨相の上に於いて甚しき相違を看取することが出來るであらう。それは簡單に地方的特徴といふだけでは解決し得られない性質のもので、人種的問題の潜在してゐるものではないかと感ぜしむるものである。この事實と併せて現在の滿洲人と蒙古人の一部とを考へて見る。滿洲人は自分の民族語たる滿洲語を忘れ滿洲文字を棄てゝ支那語を話し支那文を書いてゐる。風俗習慣すべて支那化してゐることはいふまでもないことである。蒙古人は滿洲人の如く大多數ではないとしても、漢人地域及びその接觸地帶の一部蒙古人は支那風の漢字名を稱し支那語を話し支那文を

書いて却つて得々としてゐる。かういふ人々は或は何十年か何百年かの後には滿洲人たり蒙古人たることは分らなくなるであらう。

河南省の鄭州には昔猶太人の街があり、そこに西域から移住して來た多數の猶太人が住んでゐたといはれるが、その猶太人の子孫は全く支那人のなかに溶け込んでしまつて今では跡形もない。前清時代には支那全國樞要の地に所謂滿洲城なる滿洲人の居住する一郭があつた。滿洲八旗屯田の遺風であつたが、八旗の制度は殆んど廢れて前清末の頃は單にその八旗の子孫が扶持米を貰つて生活してゐるに過ぎなかつた。それでも清朝時代にはなほ滿洲人部落として民族的存在の形を存してゐたが、清朝滅び中華民國となつてから、何時の間にかその滿洲人は民族的樣相を失つて滿洲民族としては行方不明になつてしまつた。荊州に於ては革命變亂に際して滿洲城は革命軍に文字通り屠られ、約一萬餘の滿洲人が老若男女を問はず悉く殺戮されたといはれるから、こゝの滿洲人は形をなくしたことは當然であるとしても、その他の滿洲城は必ずしも荊州のやうな血腥い慘劇を經ずに中華民國に肩變りした。しかし滿洲民族として形をなくしたことはすべて同然である。廣東及び山東省の青州に於て、私はその民族的に亡び行く滿洲人の悲慘なる姿を眺めながら、支那全土を征服した清朝入關の際の滿洲八旗の威風堂々たる姿を想像して轉た感慨に堪えなかつた。さうしてその頃から何故清朝が滅んだか、何故滿洲民族が影形をなくしたかといふことを考へた。そこで漢民族といふものゝ驚くべき存在を思はざるを得なかつたのである。かう考へて、さうして今の四億五千萬といはれる支那民族を檢討して見ると、この民族は當初から單一なる民族ではなく、黃河のほとりか何處かはつきり分らないとしても、何處かに發生した所謂漢民族なる基本民族が、その民族自身增殖すると共に更につぎ〳〵と他民族を吸收同化してその數を增して來たものでないかと考へられるのである。現在の雲南省主席龍雲は漢民族でなく、且つ雲南省には極めて多數の根つからの漢民族でない支那人のゐることなどを考へて見ても、私のこの言は決して荒唐とはいはれないであらう。かくの如く支那民族は自らは他民族に同化せず、却つて他民族を吸收同化して太つて行くといふところに驚くべき力を持つてゐるのである。しからばその同化力は何處から來るであらうか。それについては先づ支那民族の粘り强き生存力と支那文化とのこの二つの方面を考へて見る必要があると思ふ。何故なれば自ら生存し得ずして他民族を同化することは出來ないことであり、ま

た、他民族を同化するには、他民族を引きつける大なる魅力がなければならない。その魅力は即ち本能的な支那文化にあると思はれるからである。

支那民族の將來

右の如く、支那民族はそれ自身の增加と他民族の同化吸收とに依つて今日の如く多數の人口を有するに至つたものであり、さうしてこの趨勢は今後ともつゞくものと思はれる。さらに支那民族の增加について見逃がすべからざることは、その人口增加は單なる增加ではなくて、適者生存の淘汰が行はれつゝ增加してゐるといふことである。私共現代支那に於て注意して支那人を觀察して見るならば、その質に於て二つの型を見ることが出來るであらう。即ち、一は體力軟弱にして智腦の極めて發達した一群の支那人であり、他は智的にはともかく、體質の極めて强健なる群團である。無論その間に智腦體力ともに兼ね備へたもの及びともに缺けたるものなど中間的の人間の存在することはいふまでもない。しかし支那人を群團的に仔細に眺むれば、前記二つの型に分けて見ることが出來る。よく日本人は支那人の體力脆弱をいふ。しかし、これは楯の一面のみ見て他の一面を見ざるもので、支那人の中には驚くべき體力强壯なる一群があることを見落してはならない。畢竟日本人の接觸する支那人は多く知識階級であり智腦優れ體力軟弱なる支那民族群團の一面であるからである。しかし私共が支那人勞働者の中に這入つてそのどん底生活を眺め、また支那內地を旅行してその多數の農民等の生活を觀察して見るならば、その體力强健にして生存力の强きことに驚嘆するであらう。一々例を擧げる餘白をこゝには持たないけれども、普通の人間ならば死ぬべき環境にあつても、この種の支那人は死なずに生き耐えるのである。支那には昔から天災地變が多い。ときに日本では想像もつかぬほどの規模の大きい天災地變が襲つて來る。さうして支那の社會はさうした天災地變に於て他人の救助を待つことは出來ず自ら救け自ら生きて行かなければならない狀態の下につゞいて來てゐる。支那人は先祖以來幾代も幾度もかういふ天災地變の試煉を經つゝ生きて來たのである。弱いものは斃れ强いものだけ生き殘つて來た。また時々襲つて來る疫病の流行に際しても同樣である。醫學の發達は人類の生活に大なる貢獻を齎らしたことは勿論であるけれども、ときには死ぬべきものさへも生かし、そこに人間の體力の自然淘汰は行はれなくなつた。昔から醫學の餘り發

達しない支那に於ては、病弱で死ぬものは死ぬに任せ強くて生き得るものだけ生きて來た。ここにも相當大きい自然淘汰が行はれて來た。また、支那に於ては戰亂による人口の減少がいはれる。しかし、その減少の率は增加の率よりは遙かに少いものと考へられるし、またその戰亂に際してさへ適者生存の人間淘汰が巧妙に行はれてゐる。昔から「好人不當兵（ヘオレンプタンピン）」といはれ兵士になるものはろくでもないものだとされてゐる。この狀態は軍官卽ち將校は別として一般兵士に關する限り今でも格別變りはない。卽ち支那に於ては兵の死亡に於て、そこに、ろくでもない人間が死ぬといふ人間淘汰が行はれてゐるのである。さうして、戰爭に於ても戰亂に於ても利口なものは實に巧みによく逃げる。利口なものは死なず愚直なものは死ぬ。これは支那の社會の一面の現實である。二桃を爭つて死んだ齊の三士はその社會面をよく現してゐる。卽ち、支那に於ける戰亂に際しては優れたものは死なず愚なるものが多く死んでゐるのである。

かくの如く、支那に於ける天災地變、疫病の流行及び戰亂等に於て絕えず弱いものは斃れ愚直なるものは死に、優れたるものは殘り、利口なものは生き永らへるといふ一つの自然淘汰が行はれて來たのである。この狀態は現代支那に於ても變りはない。こゝに支那民族の人口增加に關し、單にその數の上からばかりでなく、さらにその質の上から觀察される一面の見方があるのである。

私は、以上數項に亘つて、支那民族の將來を考察する一端として、先づ支那の廣大なる國土と支那民族との關係、竝に人口の豐富とその豐富なる人口の增加態樣とに就て述べたが、さらに重要な問題は、その民族的性格とその民族の持つ文化の性質である。土地と人口とは主として支那民族自身の成長發達の上の問題であり、その民族性とその民族文化は他民族との接觸または他民族との對峙抗爭の場合に極めて有力に働くものであり、支那民族と直接々觸する他民族から見ればこの方が一層重要な問題であるとも思はれる。このことについてはまた別の機會に於て述べたいと思ふ。」

(二) 支那民族の悠久性

死後を樂しむ

私が、浙江省の紹興附近の山々をめぐり歩いてゐたとき、連れの董錫齡君から、支那人が自分の棺を造つて置く話を聞いた。董君は紹興の奥の剩縣の生れであり、その地方の風俗習慣については、恰も自分のことを語ると同然なのであるから信を置けるのである。支那人が、自分で自分が死んでから這入つて行く棺を準備する。自分で棺材屋へ行つていゝ棺材を選擇する。さうして自分の氣に合つたものを注文して棺を造らせる。いゝ材木で大きく綏つたりと、漆を塗つて金で模樣をつけたりして出來るだけ立派に氣持よささうに造る。出來上るとそれを自分の家に置いて絶えず手入れしては眺めて樂しんでゐる。その支那人の小さい子供が自分にも造つて呉れといつてきかないので、それと同じ小さいものを造つて、大小二つ並べて置いて眺めて樂んでゐたといふ話もあるといふのである。

紹興の郊外の石道を歩きながら、董君からこの話を聞いて、私は、その支那人の氣持が美ましく思はれた。私どもは子供のときから死といふものを恐いものとして教へられて來た。幽靈が出ると嚇かされ、墓場は恐いもの氣味の惡いものと知らされ、芝居では斷末魔の苦しみを見せつけられ、かうして、死は恐いもの思ふだにぞつとするものと考へるやうに習慣づけられて育つて來た。故に、私どもは、墓場といふものは鬼氣迫る氣味の惡いところだと思つてゐるし、棺桶といへばときに箍がゆるんで血がたれたり足首が出たりするといふやうな凄愴身の毛のよだつ感じを持ちがちである。死、死人、棺桶、墓場といふものに對し、さういふ考へ方を持つてゐる私どもにとつては、自分の棺を自分で造つてそして樂しんでこれを眺める氣持、これはすぐにはぴんと來ない氣持ではあるが、しかし、考へて見ると、まことに美しい心情でもあると思はれたのである。死後を樂しむ生活、樂しんで死んで行ける氣持、そこに何か私どもをして考へさせるものがあるやうな氣がした。

若し人間が安心して死ねないやうであつたらその人の生活といふものは慘憺たるものである

かも知れない。大君のため立派に死ぬることを思へばこそ日本人に名譽と生き甲斐があり、また老後の安心といふものがあればこそ若いものゝ落着きと勵みとがある。老後の安心、死後の幸福といふものは、その人生の歩みに與へる影響、決して少しとしないのである。このことに關して支那人の生活を考へて見よう。

大君のために死に得る生活、かうした最高の榮譽ある生活は支那にはない。いな、支那にないばかりではなく、恐らくは世界の何處にもなく日本人のみに與へられてゐる生活かも知れない。支那では「王侯將相寧有(シヅ)レ種(ラン)乎」といふ。彼も人なり我も人なり、彼はたゞ強くて勝つから王だといふのである。だから、「君不(ザ)レ君(タラ)則臣不レ臣(タラ)」ともいはれる。卽ち、支那では王が王たるためには、王たるだけのことをしなければならない。これが支那に所謂王道なるものがあり、また、人心を得るために統治者が王道をいひ王道に則ることを必要とする所以である。この點は、日本と全く國情を異にする。日本に於ては、天皇は天地開闢以來天皇にして、卽ち天皇は絶對に天皇であり、臣民は絶對に臣民である。故に、日本では王道を必要としないのである。　天皇の道は、開闢の初めから一切皇道であり王道でもあるからである。道は道なきところに現れ必要とするところに興つて來る。支那の社會では王道を必要としたのである。それでなくては人心を得難かつたからである。ところで、支那のいまの世に王道果してありや。蔣介石に王道ありや。孫文は、寧ろ、王道を排して三民主義を唱へた。三民主義はその表現の然るが如く一言にしていへば民道である。民は權力を以て天下をとらんとし民に權利を期へて天下を收めんとするものである。天下收まるわけなく人心歸一するところを持たないのである。この國に大君のために死ぬ名譽と幸福とが生れるわけはない。故に、支那は、いざとなれば、蔣介石のためにもまた國のためにも死なないで逃げる。何故なれば、蔣介石のためにも國のためにも死ぬ榮譽を持ち得ないからである。支那人は死ぬ幸福をかうしたことに求めることは出來ないのである。君の御爲、國の爲、欣び勇んで死んで行ける私ども日本人の考を以て支那人の死を考へるわけにはいかない。支那人は別に死後の幸福を考へる。

右のやうに大君のため死に得る幸福を求め得ない支那人は、結局、その幸福を個人的に求める。そこに、支那人の死後を樂しむ心持が現れて來る。樂しんで死んで行ける環境を求める。それは、一方では、自分の這入つて行く棺を造つて樂しんだり、また、別莊を造つて生前から

死後へかけての一貫した樂しい道を求めることゝもなるし、また、他方では、子を澤山生み孫を殖やし、何處で死んでも故山に歸つて葬られ、そして、葬式は極めて壯麗にし、後々の祭祀をつゞけて貰へるやうな社會狀態となつて現れてゐるのである。支那に於ける所謂別墅卽ち日本でいふ別莊は支那人の死後を樂しむところでもあるし、また、支那の厚葬といふことは、單に、子たり孫たるものゝ社會的見榮ばかりではなく、さういふ社會狀態はまた死んで行くものにとつても死後の安心と幸福とを思はしめるものである。」

會館と別莊

支那に會館、公所といふものがある。それは同鄕人の寄合所であり同業者の組合でもあるが、それと同時にそれに屬する人々の棺置場でもある。杭州鳳凰山の下に四明公所がある。それは南宋皇城の跡に造られた寧波人の寄合所で、土地も廣く建物も幾棟かあり、白堊の壁をめぐらしてその壁に大きく四明公所と書いてゐる。中には花など植ゑた美しい庭もあり、その庭を通つて行くと幾棟かの建物が並び立つてゐて、それらの建物の中には幾百、幾千といふ棺が行儀よく幾列かに並べられてゐる。大てい漆塗りの立派な棺である。それらの棺にはおの〳〵その中に這入つてゐる人の姓名鄕貫が記され、さうして、番號がつけられてゐる。卽ち、何の誰の棺は第何棟の第何列の第何號とすぐ分るやうになつてゐる。ちやうど、圖書館の書庫に本を並べてゐるやうなものである。

さうした幾千といふ死人の棺の集積であるが、そこへ這入つて見て私の感じたことは少しも凄愴の感のないことであつた。棺桶といふさへ何となく厭な感じのする私ども日本人の氣持から考へて、幾千といふ棺の並んでゐる中へ這入つたならば、やゝもすれ、鬼氣せまるとでもいつたやうなことが考へられさうであるけれども、さうした氣味惡さは少しもなく、却つて脚光を浴びてゐるレヴュー・ガールスの舞臺でも見るやうな調整の美しささへ感じられた。まことに不思議な感じである。家族のものが死ねばそれを漆塗りの棺に入れ、死者も屈んでゐては窮屈であらうといふので餘裕のある大形の寢棺とし、棺も永年腐敗しないやうに立派な堅材を用ゐ、そして前にものべた通り漆を塗り金模樣をつけたりして、その棺を一時會館や公所の中に預けて置く。さうして、適當な時期にそれを受け出して鄕里に運んで行つて埋葬するのである。

支那にはかういふ一面がある。これは全く支那的とでもいはうか、日本にはない環境である。かういふ環境をつくりかういふ環境のなかに育つて行く支那人には、その死と死人とかいふものに對する考へ方に於て日本人と異つたものがあるのではないかと考へられる。それがさらに具體的に現れてゐるものは別墅即ち別莊である。

杭州西湖のほとりに多くの別莊がある。上海あたりの金持が山紫水明の西湖の湖畔に別莊を造り、ときぐ〳〵やつて來ては悠々と山水を眺め客を招んだりして人生を樂しんでゐるのである。そこには調度の美をこらした客室もあり、また美しい庭もある。主人のゐるときは宴會好きの支那人はそこでよく客も招くし、主人がゐないときはその別莊を開放し、西湖遊覽に來た人々はその客室で西湖を眺めながら茶を飲んだりする。董其昌の書がかゝつてゐたり乾隆の大花瓶などの飾られてゐる室に、通りがゝりの遊覽客を入れてのんびりと樂しましめるといふ開放的な氣持も支那ならではと考へさせられるが、それよりも一層私の興味を引いたことは、その別莊の一部に墓場をつくつてゐることであつた。美しい庭をめぐりめぐつて行くと、ちよつとした木立があつたりして、その木立のなかに墓地がある。石造の立派な槨があり、そのなかゞ即ち墓穴である。石を積みコンクリートで固めなどして造り、前方に入口があつて厚い一枚石の扉があり、その石の扉が入口の戸でありまた墓表でもあり、その表面に何の誰の墓といふやうな文字を刻つてゐた。さうした墓穴が主人のを中央にしてその兩側に幾つかある。その兩側のものはすべて夫人の墓穴である。正夫人は主人と並び、その兩側に第二夫人、第三夫人とちやんと順序正しく並んでゐた。さうして、中にはもう佛さまとなつて這入つてゐるものもあり、また、まだ這入つてゐないものもあつた。這入つてゐるものは墓表の文字を黑字にし這入つてゐないものは赤字にしてゐた。その墓槨全部を土で覆うて可なり大きい築山のやうな形をなしてゐた。後には樹木が茂り前には池があり花壇があり、それに石の橋がかゝつたり美しい花が咲いたりしてゐた。それは明かにこの墓地も引つくるめて設計された一つの整つた庭園である。これが支那人の別莊である。

別莊の主人はときぐ〳〵都塵を避けてやつて來、金儲けの仕事は他人ごとのやうな顏してのんびりと湖畔を逍遙ひ庭を歩き自分の墓場を眺める。即ち、生きてゐるときもこゝで樂しみ死んだ後もこゝで樂しめると考へてゐるのであらう。死生一如の考へ方だ。生きてゐることも樂し

みであり死んで行くこともまた一つの樂しみと感ずる。野垂れ死すればこそ死後は寂しいかも知れないが、子もあり孫も多く、厚く葬られ愛する妻妾と穴を同じうし肩を並べて眠り、そして子孫から末永く祀られることを思へば、死後は寂しくないと感ずるであらう。支那人はかうしたところに樂しんで死んで行く道を求めてゐる。死後は寂しくなく死んでから先きでも樂しめると思ふのである。死が人間一切の終りだと思へばこそ太く短かくとか若いときは二度ないなどゝ考へるのであるが、しかし、天地の悠久と人命の儚さを思へば人間一生に果して何ごとをか爲しうるものぞ。何人も焦燥の感なきを得ないであらう。こゝに於て、生前から死後へと一貫して樂しみを求めてゐる支那人の生活及びその考へ方に焦燥なき悠久性のあることを感ずるのである。この焦燥なき悠久性が支那人の多くの日常生活となつて現れてゐる。その一つは、物ごとは成るときに成るものだ、焦つたとてしかたがないといふ考へ方である。そのことを私は一二の實例によつてのべて見よう。

太く長く生きる生活

日本では牡丹の花の咲く時季に牡丹の繪を掛けるのは遲いとせられてゐる。季節々々に床の繪を換えるのを慣はしとするが、季節といふよりも季節に先立つてといふほうがしつくりする。四月にはもう早咲きの菖蒲が店頭に出るし、五月になれば、何處から持つて來るものか、もう胡瓜が八百屋の店頭に現れる。嚴冬の二月に、山王の星岡茶寮でつくしと蕨の新芽の料理を出されたことがあつた。かういふやうに、日本人は、多くの場合に於て季節に先立つて行く初物を好み季節はづれのものを珍重する。かうした日本人的な氣持で支那のものを眺めて見ると、それは全く違つた世界であることを感ずる。

支那料理は多くの人々から世界食味の尤なるものといはれてゐる。その支那料理には初物といふものがない。五月には上海の市場に黃魚が津浪の押し寄せる如く現れ、同じく五月に錢塘江の鰣魚が食卓に出る。黃魚はまた春魚ともいはれ春の黃魚が最も味がよく、また、産卵のために錢塘江七里瀧まで溯つた鰣魚はその味天下の珍とせられるからである。それは共に季節の食味ではあるけれども、日本でいふ初物的風味のものではない。江南では冬に冬筍が出、春早く春筍が出るけれども、それはうまいから食ふので日本でいはれる初物ではない。星岡茶寮で

食べた長さ一寸ばかりのつくしとやせた蕨の芽は少しもおいしいものではなかつた。日本ではよく嚴冬の食卓に西瓜を出して得意とするが、炎暑の候、水分を欲する喉を以て西瓜を食べてこそ西瓜のほんたうの味こそあれ、何うして出かしたか何うして貯藏してゐたか知らないが冬の寒空に西瓜を食べたところで果して何の味があるものか。支那料理では季節はづれの興味や霞の如き氣分といふものを顧みず、古い乾物をいかに巧みに料理するか平凡なものをいかにうまく食ふかといふところに力を入れてゐる。それは日本料理と支那料理との相違の一面でもありまた日本人と支那人との民族性の相違の一面でもあるかも知れない。季節を先きへ先きへとつねに拔駈けを思ふところに進歩はあらうが一方また焦燥と目まぐるしい氣移りがあるのではないか。支那人は平凡なことを平凡に取扱かつて兀々と太く長く進むことを考へてゐる。急げばこそ細く長くのびるであらうが、自然に順應して急がず焦らず、物ごとは成るときに成るものと思ひ、一歩々々たゆみなく歩き、行きつくべきときには行きつくものだと考へて行けば、それは水の流れのあらゆる間隙を充實して進むやうにすべてをふくらまして太く長くのびるのである。支那人の人生は太く短かくでなく、また細く長くでもなく、實に、太く長くである。

支那民族の粘りはかうしたところからも出て來る。

日本では七月の雜誌が六月にはもう店頭に並べられてゐるといふ氣の早さであるのに、支那ではまた何といふ氣ののろいことか、前の年の雜誌が年を越してまだ出ないことがある。事變前、商務印書館で發行してゐた東方といふ雜誌はあらかた半年位づゝ遲れて發行されてゐた。出す方でも平氣であるし、讀む方でもそれでいゝのであるから問題はない。アプ　ツウ　デートといふが、アプ　ツウ　デートを內容としたものは幾日か幾十日が經てばもうアプ　ツウデートでなくなるのだから、支那人はさういふ命の短いものに興味を持たないのである。だから、雜誌でも書物でも、いま出さなければ時機を失するとか今出さなければ賣れないとかいふことは、支那では餘りはやらない。あれだけ利害に敏い支那人であるが、それにも拘らず、支那ではいはゆる際物（きはもの）といふことが餘りいはれない。このことは出版物とかぎらず商賣でも同じことである。支那人は決して一攫千金を夢見ず、たゞ兀々と金を貯める。貯めて流さず、いつの間にか大金持となる。一攫千金は夢と消失せもするが、兀々と貯めた金はだん〳〵と太り、そして太れば太るほどまた貯まるのである。それは支那人の金の貯めかたでもあり、また、支

那民族の太りかたでもある。

民族の事業

昭和四年、杭州に西湖博覽會が開かれた。三月一日開會と定めて前年の夏頃から準備にかゝつた。その年の暮頃になつて博覽會のための一つの事業として西湖々畔の道路の整理に着手した。山を切り巖を碎き湖を埋めたりして極めて大規模に仕事にかゝつた。年は暮れて一月となつても二月となつてもまだ出來上らず極めて緩りと本格的に道路工事を進めてゐた。博覽會の會場も一向進捗してゐなかつた。三月一日の開會には誰が見ても間に合ひさうもなかつた。

そのとき私が博覽會當局者に向つて一たい三月一日の開會に間に合ふかと訊ねたら、間に合ふもんですかといつてゐた。それでは何うするかと疊みかけて聞くと、打てば響くやうに、延ばすさ、と平氣でいつてゐた。私はあきれるよりも感心した　私が感心したのは延ばすといふことよりもその延ばすことに對するその支那人の態度であつた。若しそれが日本人であつたとすれば延ばすことに對して責任を感ずるとゝもに延ばさなければならないことを自分の辯解ともなりまた人も納得するやうに理由づけ、いづれにしても豫定を延ばすことに對しては責任當局者として極めて神經質的であることを常とするが、その支那人の態度は少しも理窟づけず出來ないものは出來ない出來るまで延ばすよりしかたがないといつたやうな極めてあつさりとしたものであつた。當局者の態度もさうであり、さうして、世間もそれで通るのである。私は、このとき、支那人や支那の社會といふものは私どもの尺度を以てしては計られないものであることを思つて感心したのであるが、感心したことはまだある。

その西湖博覽會の一つの催物として噴水塔を計畫してゐた。西湖の中に塔を立てゝその塔から水を噴き出させようとするのであつた。當時、杭州にまだ水道のないときで、水壓を何處から持つて來て水を噴き出させるつもりだつたか知れないが、とにかく、湖の中に杭を打つたりして工事を進めてゐた。それも開會には到底間に合ひさうもなかつた。三月一日開會の豫定を四月に延ばし、さらに六月に延ばし、六月十日漸く開會した。開會したといふものゝ、それは開會式を擧げたといふに過ぎず、中は大かた空つぽであつた。會場の中が陳列品で一ぱいになつたのは夏も過ぎた九月頃であつた。さうして十月十日閉會した。

その西湖噴水塔は六月十日開會の際はまだ土臺も出來てゐなかつた。九月になつても何も出來ず、それでも何か兀々と工事をやつてゐた。十月十日の博覽會閉會に際してもまだ塔も出來上らなかつた。博覽會は閉會した。それでもまだ兀々と工事をやつてゐた。博覽會が閉會してからさらにしばらく經つてひよろ〳〵と榮養不良のやうな塔が立ち上つた。水も何も出はしない。博覽會當局者はそれを西湖博覽會紀念塔と命名した。それがいま西湖中山公園の前の湖水のなかに立つてゐる塔である。西湖へ來たある日本人の畫家が西湖を寫生するときこの塔を邪魔とばかり畫面からとつてしまつた。私はそれをあらずもがなの塔と名づけた。それほど西湖風光の邪魔になる塔であるが、しかし、その塔のかうした由來を考へて見ると、その一箇の塔から計り知られぬほど深味のある支那人の民族性が窺はれる。物にこだはらず、物は成るときに成るものだといふ悠々として迫らざる氣持、かうした支那民族の悠々たる氣持を、私どもはこの塔によつて眺めることが出來るのである。さうして、この氣持があればこそ、かの萬里の長城や、雲岡の石佛や、房山の石經や、灌縣の水渠などの成るゆえんも當然のことゝして考へられるのであり、それによつて支那古來の大事業が出來たものとも考へられる。大事業は一朝にしては成り難し。個人的名譽は短い人間の一生に於ても得られるであらうけれども、民族的大業ともなれば人間の短かい一生では達せられない。萬里の長城も決して始皇一代に成つたものでなく、始皇の前から遠く明代にまで及んで築かれてゐる。雲岡の石佛も房山の石經も決して一人一代の手によつてなつたものでなく幾世代幾百年の年月を費やして完成されたものであること周知の通りである。灌縣の都江堰及びそれから分れる水渠灌漑は李冰父子がこれを創立しその後歷代に亙つて建造補修せられ以て四川天府の基をなしてゐるのである。事業の偉大は千年不易の事業を創造することである。完成は個人の力ではなく民族の力である。或は人類の力と考へたほうがもつと力强く永遠性を帶びるものであるかも知れない。私どもは、今日、目の前に、民族的英雄的大事業である萬里の長城が空しく廢墟となつて秋風落寞たる朔北にその殘骸を曝してゐるのを見、人類的社會的事業である灌縣の大灌漑はいまもなほ脈動して四川の富源となり五千萬の人口を養つてゐるのを見る。民族的偉業でさへ、若しそこに人類の榮譽と幸福とを求むる要素の存するものにあらざれば永遠照耀の力なきを感ずる。私ども東西の歷史に於て餘りにも多くその實例を見得るではないか。

天命を待つ

飜へつて支那民族の性格を考へて見ると、そこに國家的たるよりや民族的色彩を多分に見、さらに、仔細にこれを眺めてゐると、民族的たるよりも個人的であり、さらに、個人的たるよりも人間的たることを感ずる。個人の一生は蜉蝣の如く儚ないものであるとしても人間の生命は永遠のものであり、その人間の生命を生命として生き得るところに支那人の悠々たる氣持が現れてゐるのではないかと感ずる。人力を盡して天命を待つといふ。日本人は天命を持たず潔く死するを以て武士の鑑とする。支那人は人力を盡してさらに天命を待つ。我が人力を盡すよりも天命を待つほうに重きを置くものであるかも知れない。助からざるものと知りつゝも、或は生きてゐられない筈でありながらも、なか〳〵自ら死なゝい。楊貴妃が首絞められて殺されたのも、あの土壇場に至つてさへ自ら死ねなかつたゝめであり、拳匪の亂にその元兇として死を賜はつた趙舒翹も、自ら潔く死なず、無理に阿片を飲ませられ砒霜を飲ませられそれでも死に切れず皮紙で包み殺されてゐる。民國十七年の新疆變亂に於て主席楊增新を殺した樊耀南が形勢不利となつて助からざることが明かとなつたに拘らず、自ら死なず捕へられて鬚を拔かれ眼を控られ奔馬の尾に結びつけられて虐殺されてゐる。かうした支那人の容易に死なない氣持は日本人には分らない氣持であらうし、また、日本人と支那人とその性格の最も異つたもの〻一つでもあると思はれる。日本人は人生の意氣と日本人たるの名譽とを重んじ、支那人は個人としても人間としても生きることを第一とし、最後の一瞬間まで天命を待つ。それで待つ天命も來らず悲慘なる最期を遂げることもあるが、また、待つ天命の來て命永らへ再び盛り返すこともある。これは支那人の個人として國民として外形的には弱いところでもあらうが、一方、また、人間として民族として永遠的な强味を持つてゐる所以でもあるのではないか。支那人は生きて人生を樂しみ死んでもまた樂しむべきことを求めてゐる。人生を太く短かく考へず、太く無窮と考へるところ、そこに、急がず焦らず、天地の悠久たるよりももつと悠遠に生きようとするその悠々たる氣持が生じるのではないかとも考へられる。

(三) 張騫の西征と支那民族性

一

張騫が西域に使したことは、いまさら、事新しく取り立てゝ論ずるほどもない問題であるかも知れないし、また、これに關して、內外多くの學者も、殆んど論じ盡したといつてもいゝほど互に論及してゐるのであるが、私が、こゝに述べんとすることは、これまで先人の取扱つてゐたやうな張騫西征に關する考證的論爭に參加したりまたはこれを批判せんとするものでなく、張騫西征といふ大きくさうして明白な事實に對して、全然別の立場からこれを考へて見ようとするものである。

從來、張騫西征に關する多くの研究は、主として、張騫西征の事實、竝に、その當時の西域諸國諸民族の狀況及び漢とそれら西域諸國との關係等であり、これによつて、いろ〳〵な事柄が明かにされてゐることは、私ども後學のものにとつて大きな喜びである。たゞ、問題は、一つ〳〵の瑣末な事柄までも餘りにも微に入り細に入つて考證探究してゐる結果、却つて、通俗的かも知れないがしかし大きい問題を考へることを忘れてゐたのではないかといふことである。

張騫西征の事蹟は主として史記大宛傳、漢書張騫傳及び西域傳等に據るものであるが、これら史記及び漢書の記事も極めて簡單であり斷片的であつて、その年代、經路及び各地の狀況等についても、必ずしも明白に記されてゐない。そこに學問的な論爭課題が提供されてゐるといへばさうもいへるであらう。故に、學者は、そこに現れた一つの地名、一つの國の所在地、または一字一句の文句などについて多大の努力を傾けて互に論爭してゐる。

西域三十六箇國ともいはれるが、國といつても當時の國は今日の國家の如き形體を持つてゐたものではなく、いはゞ一部族たることは明かであり、さうしてその部族の多くは遊牧民族であつたこともまた明かであるから、今日現存の遊牧民族の狀態から推して考へて見ても、それらの部族は時に隨ひ必要に應じて轉々と居を變へてゐたであらうことは想像される。それら遊牧民の足跡や居所を宏大無邊の沙漠草原地帶に探し求めて確定せんとしたところで、それは精

力を徒費する以外の何物でもないではないかとも思はれる。しかし、さういふのが學問であるといふならば、また何をかいはんやである。私は、こゝに、素人たる氣安さを以て、張騫の西征を極めて通俗的に考へて見たいのである。さうして、寧ろ、そこに、却つて前人の觸れなかつた大事な問題が殘されてゐるのではないかとも考へるのである。

二

漢の武帝が張騫を西域に派遣したこと、さうして、派遣の目的は大月氏と結んで匈奴を伐たんとするためであつたこと、竝に、張騫がその途中匈奴に捕へられて匈奴の國に留まること十餘年、匈奴の婦人を妻とし子までもうけ、しかも、初志を飜さず、十餘年の後、匈奴の國を脱して大月氏の國へ行き、使命を果すことに努力したこと、さうして、その歸途、再び匈奴に捕へられたが、それでも死せず、うまく生きうまく逃れて漢に歸つたこと、これだけのことは明白である。張騫が何年の何月に立つて何月の何月に歸つたか、何處を何う通つて行つたか、そのときに西域諸國は何處に何うしてゐたかといふことは必ずしも明かでなく、從つて學問的興味はさうした未知の問題を探ることにあるかも知れないけれども、以上述べたやうな諸點は史書にも明白に記されてあり、各書の記錄も一致して居り、そこに何等疑うべき餘地がないのである。私は、その明白な事實について、これに加ふるに私の支那大陸を廻り歩いた經驗とさうして三十年間支那人と接觸してゐた體驗とを基礎として、その張騫の西征によつて窺はれる支那民族性といふやうな極めて平凡なことを考へて見たいのである。何故なれば、私にとつては、風が吹けば消えるやうな沙漠の足跡を辿つたり、空飛ぶ雲の所在を確めんとするやうなことよりも、寧ろ、その明白な事實の中から支那民族の民族的體臭を探り求めることがその研究を現代に生かし得るものと考へられるからである。その民族的體臭こそ張騫の時代も今も變りなく、從つて現代の我々日本人の民族生活とも深い關係を持つてゐるものであることを感ずるのである。考へを進める順序として、先づ、張騫西征の事蹟を一應簡單に述べて置きたい。

三

張騫の生年その他年齡に關しては、漢書張騫傳にも何等記されてゐないから、はつきりした

ことは分らないのであるけれども、その活躍した時代は、漢の武帝一代である。二度、西域に使し、一度は遠く大月氏から大夏、卽ち、いまのソ聯領トルキスタン地方にまで赴き、一度は烏孫に使してゐる。

張騫が、初め西域に使するまでは、その名は餘り現れてゐなかつた。武帝が西域派遣といふ當時の狀態を以てすれば全く劃期的の計畫を立てたとき、張騫は自らこの大役を買つて出た。武帝は卽ち張騫を主班とし一行百餘人の大勢を以て西域派遣使節を出すことゝした。當時、これら漢使の赴かんとする西域は、第一に、漢にとつて多くは未知の地方であり、第二に、その間に群雄割據、諸國亂立のありさまで、政治的の混亂と危險とがあつた。のみならず、張騫は、その西域諸國の混亂に乘じてこゝに政治的活動をせんとするのであつたから、恰も敵國に使すると同じく、果して無事に目的を果して歸り得るか何うか豫想し得ない狀態であつたと思はれる。

その頃、漢の西北にゐた匈奴は、その勢ひ强大を極め、漢は高祖建國以來その南進に惱まされてゐた。その匈奴の西には、いはゆる烏孫、大月氏などの國があつた。これは、前にも述べた通り、國といふよりも部族と見たほうがはつきりする。部族であるから轉々と移動しその處を變へるといふ特性を持つてゐるのである。史書のいはゆる行國である。先づこのことを考へに入れて置いて當時の西域諸國の狀況を見る必要がある。

當時、漢は長安に都し、その領土は、大體西北方に於ていまの甘肅省西部臨兆から隴西にかけての長城線あたりにまで及んでゐた。その西は匈奴の地域であり、さらに、その西方に烏孫が居り、そのまた西方に月氏がゐたのである。匈奴も、烏孫も、月氏も、果して現代のどの種族に屬するものであるか。卽ち、蒙古族か、トルコ族か、或はその他の種族か、この問題は昔から諸學者論爭の的になつてゐるもので、今に至つてなほ甲論乙駁はつきりしないのである。たゞ、明瞭なことがある。それは、これらの民族はいづれも遊牧民族であつたといふことである。匈奴に關しては、史記匈奴傳に、

「居二于北蠻一、隨レ畜牧而轉移、其畜之所レ多則馬牛羊、……逐二水草一遷移、毋二城郭常處耕田之業一」

とあり、また、大月氏國に關しては、漢書、西域傳に『大月氏本行國、隨レ畜移徙、與二匈奴一

同レ俗』とあり。即ち、匈奴、烏孫、月氏などの各民族は今の何の種族であるかは分らないとしても、遊牧民族であつたことは明かである。このことは極めて大事なことだと思ふ。何故なれば、現在なほ存在してゐる遊牧民族たる蒙古族やキルギス族などの生活、行動等によつて、推して匈奴、烏孫、月氏などの諸部族の生活、行動等を考へることが出來るからである。即ち、これらの諸部族は現在の蒙古族と同じやうに、草原を地盤とし馬を驅つて活躍し、或は水草の有無により、或は部族鬪爭の政治的關係により、時により處により轉々とその居を變へてゐたことが想像されるのである。その居を變へたことが即ち國を變へたことゝなるのである。支那の史書の國といふ言葉はかういふ輕い意味に考へるのが適當であると思ふ。春秋戰國といひ西域三十六ケ國といふ。必ずしも、現在私共がいふ國なる概念を以つて考へる必要はない。上に一人の首領を戴いた一つの部族と考へていゝと思ふ。その國々は、互に同民族なこともあり、また異民族たることもあり得るのである。

右のやうに、匈奴、烏孫、月氏の種族的素性は明かには分らないとしても、共に、漢民族に對して異民族たることは明かであり、さうして、これら三者ともに部族として互に爭鬪をつゞけてゐたこともまた明瞭である。匈奴、月氏互に相爭うてゐたといふこと、そこに張騫派遣の原因が崩してゐるのである　即ち、武帝は、月氏と結んで匈奴を挾擊するためにその月氏說得の使者として張騫を派遣したのである。

四

張騫は一行百餘人の大勢を以て漢を出發し、いまの甘肅省を通つて大月氏の國を指して行つた。その出發の年は史書に誌されてゐないけれども、張騫は西域各地に約十三年滯在して、武帝の元朔三年に歸つたといふから、これから逆に數へて見ると、彼は建元二年（皇紀五百二十二年）頃出發したことゝなる。

當時、匈奴の勢力は强大で、漢の北方から西北にかけて蟠踞してゐたことは前に述べた通りである。張騫が通つて行かんとする隴西の道、即ちいまの甘肅省の西部は匈奴の勢力圏であつた。その南に羌族がゐた。羌族はいまの西藏族といはれてゐるが、當時、この種族も匈奴に服從してゐた。いづれにしても、張騫は、この匈奴の地、即ち敵地を通つて行かなければならな

かつたのである。百餘人の大勢を以て敵國を通つて行くなどゝいふことは、今風の解釋を以てしては考へられないことであるけれども、これは前に述べた通り、當時の國は部族の蟠踞してゐる土地であり、さうして匈奴は遊牧民族であつたといふことを念頭に置いて考へて見れば、張騫の敵地通過といふことは考へられないわけはないのである。卽ち、匈奴は涯しもなく廣い草原に遊牧してゐる。從つて、必ずしもその草原の何處にでも匈奴の姿が見えるといふものではない。國境線といふものがあるわけでもなし、また必ずしも、至るところに見張りがゐるといふのでもなかつたと考へられる。張騫一行は、さうした間隙を縫うて匈奴の土地を拔けてその西方の月氏の遊牧地へ行かうとして出發したものと考へられる。

しかし、張騫一行は、匈奴につかまつた。さうして、張騫は抑留された。百餘名の一行の始末は一部を除いては明かでないが、張騫は、その抑留中に匈奴の女を貰ひ子さへ生ましてゐるところを見ると、抑留とはいふものゝ相當優遇されてゐたものと思はれる。張騫が匈奴に抑留せられてゐること十年、その間、張騫が何をして暮してゐたかは明かでないけれども、その十年間、張騫がなほ大月氏行きを斷念しないで考へてゐたことは、張騫が、その十年後、つひに、機會をとらへて匈奴を脫し大月氏へ向つて出發して行つたことによつて明かである。

五

大月氏部族はもと匈奴の西方。卽ち、いまの天山北路伊犂地方にゐたことは史書の記載によつて明かである。張騫は、當初、漢を出發するときはそこへ向つて出發したものと考へられる。しかるに張騫匈奴抑留の十年間に於て、この西方の形勢一變して、大月氏はすでに天山北路の地方にゐず、ずつと西の方に移轉して、いまのサマルカンド地方にゐた。この大月氏の西方移轉は烏孫の西進によつて起つたものといはれてゐる。匈奴の西、大月氏の東方にゐた烏孫は、大月氏を攻め、これを逐うてその土地を占領したのである。大月氏は烏孫は逐はれて西方に移轉した。

伊犂から伊犂河に沿ひ天山の南脈に沿うて西へ行くと茫々たる草原である。卽ち、キルギス草原である。いまも、こゝに、伊犂から國境を越えてソ聯領中央アジアに行く道がある。寧遠卽ち固爾札（クルザイ）から西方に向つて徒步約二十五日行程でキルギス共和國の首府ウエルニイに達する。

この行程は、大體に於て茫々たる草原である。いまでもキルギス人が遊牧してゐる。ウエルニイからさらに約九日行程でビスベーキに達する。こゝはもうトルキスタン共和國であり、さうして、それから、西に行つてタシケンド、さらに西南に行つてサマルカンドに達する。茫々たる草原地帶が、ときに、山脈の間を縫うて行くことがあるとしても、大體に於て、伊犂からサマルカンドあたりまでつゞいてゐる。遊牧民たる大月氏が伊犂からサマルカンド地方へ移つて行つたといふことはあり得ることである。こゝで大事なことは、張騫は、その遠く西方へ移轉した大月氏を目指して初志を飜へさず進んで行つたことである。

張騫は匈奴を脱して西に向ひ數十日にして大宛國に達した。大宛國の所在並にその首府であつた所謂貴山城の所在は、諸學者論爭の中心である。未だ必ずしも完全に解決せられてゐないけれども、しかし、大體に於て、葱嶺卽ちパミール高原の西方のフエルガナ地方にあたるものといはれてゐる。さうして、大月氏の新領土は、その大宛國の西方若くは西南にあつたと記されてゐる。史記大宛傳には、大月氏は大宛の西二、三千里に在りと記されてあり、また、漢書、西域傳には、大月氏は大宛の西南六百九十里にありと記されてゐる。この問題に關しては、漢書の記事のほうが正確に近いものとせられてゐる。かくの如く、大宛國及び大月氏の所在ともに正確には知り難いのであるが、大體に於て、大宛國はフエルガナの地方、大月氏の國は今のサマルカンド地方にあつたものと、比較的確からしさを以て考へられてゐる。

張騫は大宛國に着いて、漢國の威光と富裕とを誇示して、さうして、大宛國から康居まで、康居からさらに大月氏まで護送せしめた。かうして、張騫は、幾多の紆餘曲折を經、漢を立つてから十餘年、匈奴を脱してからでさへ恐らくは幾月といふ難行を經て、漸く大月氏の遊牧地に到着したのである。

張騫が大月氏へ着いてから、當初の目的通り匈奴に對する攻守同盟を說いたことは想像される。然るに、大月氏はこれに應ぜず、張騫はつひに要領を得なかつた。その理由について、前漢書張騫傳に次のやうに記してゐる。

『大月氏王已爲胡所殺、立其夫人爲王、既臣大夏而君之、地肥饒少寇、志安樂、又自以遠漢、殊無報胡之心、騫從月氏至大夏、竟不能得月氏要領』

その理由は極めて明白である。卽ち、月氏の新領土は土地肥饒にして寇賊少く、そこに安樂

に暮してゐるので、もう匈奴に復讐せんとする志がなかつたのである。つひに、張騫は、せつかく、遠く大月氏の國まで行つたけれども、要領を得なかつた。さうして、大月氏に留まること一年餘りにして歸路についた。その間、大夏へも行つたことは勿論である。

張騫が、これら、大宛、康居、月氏、大夏等、卽ち、今のソ聯領中央アジア諸國の土地を具さに視察し、また、その四方の國々の狀況を聞いて歸つたことは、張騫當初の目的たる政治的使命とはまた別の意味に於て、卽ち、外國の新知識として、漢に多くの影響を齎らした。このことは周知の通りである。

張騫は月氏よりの歸路、再び、匈奴に捕はれ、また留まること一年餘り、その間匈奴王死し國內が亂れたので、その隙に乘じて、匈奴の妻及び從者一人をつれて漢に歸つた。張騫が初め漢を出發したときは一行百餘人、苦難十三年の後、歸つたもの張騫と堂邑父卽ち胡人の從者とたゞ二人であつた。ほかに、匈奴に於て新たに得た妻をつれて歸つた。初め、匈奴滯在の十餘年の間に於て妻を得、子をもうけたとあるけれども、その子は何うなつたか明かではない。

六

これがいはゆる張騫の第一回西征である。この張騫の第一回西征は支那の歷史及び文化の上に偉大なる足跡を遺したものであるが、それとは別に私ども外國人にとつて最も强く感ぜられることはその中に親はれる支那人の民族的性格である。勿論、支那の歷史、小說を讀んで、その何れを見ても支那人の民族的性格の現れてゐないものはないとしても、この張騫の西征は、對外關係であり對異民族關係であり、その點に於て、特に私どもの注意を喚起するものがある。それは約二千年前の張騫の時代のことでもあり、また今日の姿でもあることは、何らか私どもをして眞劍に考へさせるものあるを感じるのである。

第一に考へられることは、この張騫の西征に明確に現はれてゐる支那の遠交近攻政策である。それは遠く交つて近きを攻める策であるとゝもに、異民族に對する關係に於ては所謂夷を以て夷を制するの策である。

このことは支那人自身に於ても極めて明瞭にこれを言つてゐる。卽ち、前漢書、張傳騫の冒

頭に於て、撰者班固は次のやうに述べてゐる。

『張騫漢中人也、建元中爲郎、時匈奴降者言、匈奴破月氏王、以其頭爲飲器、月氏遁而怨匈奴、無與共擊之、漢方欲事滅胡、聞此言欲通使、道必更匈奴中、廼募能使者、騫以郎應募、使月氏、與堂邑氏奴甘父、俱出隴西』

漢は、その建國以來匈奴の進攻に惱まされてゐたとは前に述べた通りであり、この匈奴を討つことは漢代々の一苦業であつた。武帝はちやうど、さうした漢の對匈奴苦難の時代に卽位した。たま〳〵匈奴の彼方の月氏部族がその王を匈奴に殺されて匈奴を怨んでゐるといふことを聞き、月氏と結んで匈奴を伐たんと謀り、その月氏說得の使として張騫を派遣したのである。卽ち匈奴の背後にゐる月氏をして匈奴の後を突かしめんとしたのである。所謂「以夷制夷」の政策である。遠交近攻の政策であるは勿論であるけれども、以夷制夷の政策は異民族の間に行はれるところに特徵を持つてゐるのである。

遠交近攻政策は、その以前に於ても、春秋戰國時代から支那民族の常習であり、その多くの實例を見ることが出來るけれども、他國他民族を對手として外交的にこの政策を利用したのは張騫の西征を以て初めとするのではないかと思はれる。支那では昔から隣人相和せずともいはれ、隣り同志仲よくして遠くの敵に對するといふことは、支那の歷史に於ては極めて例は少い。これに反して遠人と和して近人を攻め、また、遠くの異民族をして近くの異民族を或は擊肘せしめ或は擊たしめるといふやうな事例は殆んど枚擧に遑がないほどある。宋と遼、金、元との關係はその尤もなものである。宋は金と結んで遼を滅ぼし、また、元をして金を滅ぼさしめてゐるけれども、結局はその元のために自らも滅んでゐる。近人倒れた後に自分も倒れることは明白であるけれども、支那人は何うしても近人とは和し得ないのである。

近隣相和せざるの事實は、異民族關係に於ても支那と支那をめぐる異民族との關係を見れば極めて明白である。支那史に於ける漢民族とその近接異民族との關係は常に征服同化と被征服との關係であつた。未だ曾て平等親善關係の成り立つてゐたことはない。征服同化とは、漢民族が異民族を征服し、または、これを同化して漢民族化せしめたことであり、被征服とは漢民族が他民族のために征服せられたことである。こゝで大事なことは、漢民族は他民族を同化する力を多分に持つてゐるが、他民族に同化せられた事實は民族としては全くないといふこと、

それから、漢民族は時に他民族から征服せられるけれども、その征服中に於てさへその征服民族を同化する恐るべき力を持つてゐるといふことである。さうして、征服は畢竟一時的であり、征服されてもいつかは盛り返すときも來るであらうが、同化は永久的であり、すでに同化した後に於てはこれを救ふすべはないのである。私どもは支那と支那の周邊の他民族との關係に於てこれらの多くの事實を見ることが出來る。さうして民族革命後の前代清朝の姿を觀るとき、最も痛ましく生々しいその事實を見るであらう。

支那と日本との關係は、隋唐以來永い間親善友好の關係にあつた。それは、日本と支那とは隣國でなかつたからである。海路交通の開けた近代こそ海は兩國の關係を和げる何らの緩衝地帶ともならず、英獨兩國は海を隔てゝ相爭ひ、日米兩國は廣大なる太平洋を隔てゝさへ相戰つてゐるのであるが、海路交通の發達しない昔は、海は有力なる一つの緩衝地帶であつた。元國が海を渡つて日本襲擊を企てたことがあつたとしても、それも結局失敗し、海は日支兩國を隣國的地位から遠く離してゐた。それのみならず、支那の東北方には幾多の異民族が支那と日本との間に介在して居り、日支關の關係はこれを政治的に見て必ずしも隣國とはいひ得なかつたのである。日支兩國が名實共に隣國的關係に入つたのは支那が日本と一衣帶水を隔つる朝鮮にその勢力を延ばして來てからであり、さうして、日清戰爭となり、日本が遼東半島を領有するに至り、實質的にも明確に支那の隣國となつた。こゝに於て、直ちに、支那得意の以夷制夷の政策が行はれるに至つたのである。卽ち、三國干涉となり日本が幾萬の血を流して贏ち得た遼東半島を支那に還附するの已むなきに至つた。今でも、史書を讀んでこゝに至るごとに切齒扼腕おく能はざるものがある。

日露戰爭の結果、日本が關東州を租借すること丶なり、また、日韓合併によつて朝鮮が日本の領土となるに及んで、日本が支那と大陸つゞきに境を接するやうになつた。加之、海上交通の發達は海路をちゞめ、ときに、坊間、長崎縣上海など丶も稱せられたやうに、日支兩國はこの方面に於ても亦た陸上接觸と殆んど變らざるまでに接近した。もう、日本は支那にとつて遠國ではないのである。まさに隣國であり、隣國となるに及んで複雜なる利害關係が兩國の間に大きく現れた。こゝに於て支那は再び遠交近攻政策を施し以夷制夷の策を用ひ、それが引いてはワシントン會議となり、また、ソ支不可侵條約となり、英米の對日攻勢となつて現れたこと

は事新しくこゝに述べるまでもないことであらう。

かういふ支那の傳統的政策たる遠交近攻、以夷制夷の政策が、遠く漢代すでに張騫の西征に於て現れてゐるのであるから、その由來、蓋し遠く古いものである。さうして、二千年の後も同じくこれを繰り返してゐるのを見れば、その因習の恐ろしく根強いことを知るに足るべく、さらに、今後百年千年の後も、また同じことの繰り返さるべきことが考へられるであらう。

七

以夷制夷の政策が張騫西征によつて極めて明確に示されてゐることは右に述べた通りであるが、さらに、私どもは、張騫西征によつて示されてゐる支那民族の粘り強さを見逃がすわけにはいかない。張騫が大月氏に使して、十三年間の辛苦艱難を經て使を全うして歸つたこと、しかも、その間前後約十一年餘り匈奴の敵地に於て巧みに生きてゐたといふこと、さうして、その敵地に於て妻を娶り子を産んで幸福さうに暮してゐながら決してそれに同化せず、一度機會を見ては脱して大月氏に赴き、二度び機會をとらへては漢に逃げ歸つて初志を貫徹したといふこと、かうしたことは、張騫身邊の一些事として見逃がせばそれだけであり、また、じつさい、張騫西征の政治的文化的效果の偉大なるに眩惑せられて、張騫西征に現れた張騫の個人的動作は看過されてゐるけれども、しかし、仔細にこれを觀察するならば、そこに、我々日本人には到底あり得ない支那人の民族的性格を見ることが出來るであらう。前に述べた以夷制夷の政策は支那民族性がその國家的生活の上に現れたものであり、私がこれから述べんとすることは支那民族の個人生活の上に現れてゐるものである。それは決して單なる張騫一人の私的生活ではなく、支那民族性の一つの反映であり、即ち支那民族の生活であると思はれるのである。

西域に使した張騫の行跡を眺めて、最も目立つてゐることは、張騫が匈奴に捕はれ、さうしてその匈奴の許にあつて妻を貰ひ子を生んで安樂なる個人的生活を送つてゐたことである。このことについては、史書にも明確に記されてゐるから疑ふ餘地はない。

『俱出二隴西一、徑二匈奴一、匈奴得レ之、傳二詣單于一、單于曰、月氏在二吾北一、漢何以得レ往レ使、吾欲レ使レ越、漢肯聽レ我乎、留レ騫十餘歲、予レ妻有レ子、然騫持二漢節一不レ失、居二匈奴一西、騫因レ與二其屬一亡、嚮二月氏一、西走數十日至二大宛一』『前漢書、張騫傳』

即ち、張騫は、今の甘肅省の西に出で匈奴の西を通つて行つたがそこで匈奴に捕へられた。捕へられて匈奴王の前に引き出され、王が、月氏は吾が北に在り、漢が何のためにこれに使を遣はすか、おれが漢の向ふの越に使を出しても果して漢が默つてゐるかといつた。張騫がこれに對して何と答へたかは記されてゐないが、しかし、王と張騫との問答の結果は明瞭である。即ち、張騫を留めること十餘年、妻を與へ子有りといつてゐる。張騫が初め匈奴に捕へられたときは、「匈奴得レ之ヲ」といひ、また、「傳二詣單于一ニ」といひ、即ち、捕へられて單于の前に引き出されたのである。今の言葉でいへば俘虜となつたのである。さうして、張騫が俘虜として單于、即ち匈奴王に訊問された。その訊問の結果、王は張騫を匈奴の地に留めた。妻を與へ子有りといふから、それは、必ずしも收容または抑留といふ形ではなく、相當優遇して、何かにつけこれを利用してゐたことゝ想像される。或は政治顧問のやうな地位を與へてゐたのかも知れない。張騫傳に、「騫爲レ人彊力寛大信レ人ヲ、蠻夷愛レ之ヲ」とある張騫が蠻夷からさへ好かれるやうな人柄であつたことは分る。故に、張騫の匈奴滯在は俘虜として抑留せられてゐたといふよりも寧ろ何らか單于の顧問といつたやうな形で留められてゐたものと思はれる。元の太祖チンギス汗には遼人耶律楚材といふ顧問があつたし、世祖忽必烈の許には漢人劉秉忠なる顧問がゐたことは有名であり、北方遊牧民族にはかういふ他民族を包容しまたその才能を用ゐる寛大なる氣持があるのである。張騫が十餘年も匈奴の中にゐたといひ、しかも、妻を貰ひ子をもうけてゐたといふ。私は、決して張騫が一般俘虜と同じやうに抑留虐待せられてゐたとは思はない。寧ろ優遇されてゐたと思ふ。そこで考へられることは、張騫が漢の重要なる使者としてその敵國たる匈奴に捕へられ下手をやれば首刎ねらるべきところを、その王の訊問に對して巧みに答へ却つて優遇されるに至つたこと、さうして、敵國人たる張騫がその匈奴の敵國に於て妻を貰ひ子までもうけて十餘年間恐らくは樂しんで生きてゐたといふこと、しかも、その心中に於ては、なほ初志を飜へさず、いはゆる「漢節を持して失はず」、機會をとらへて脱走したといふことである。

八

張騫が月氏に使する以前はもとより、張騫が匈奴に留まつてゐるその十餘年の間も、漢と匈

奴との關係は仇敵の關係であつた張騫が漢を立つたと推定される建元二年から元朔三年漢に歸るまでの間に於てさへも、匈奴ぱ屢々漢に入寇してゐる。卽ち、元光六年に於て、匈奴上谷に入り吏民を殺戮し、同年秋また邊疆に寇し、元朔二年の秋匈奴遼東に入り太守を殺し、漁陽、雁門に入つて都尉を敗り二千餘人を殺戮し、漢は又これに對して、衞青、李息の二將軍をして雁門、代州から塞外に出て匈奴を討伐せしめ、匈奴の首數千級を獲たといふ。さらに、また、元朔二年、匈奴上谷、漁陽に入り吏民千餘人を殺戮し、漢はこれに對して、また、衞青、李息を遣して匈奴の本據たる符離を襲はしめ匈奴の首數千級を得たといふ。それにもかゝはらず、また、元朔三年の夏、匈奴代州に入り太守を殺し、雁門に入り千餘人を殺戮してゐる。かうした漢と匈奴と鬪爭をつゞけてゐる間にあつて、その漢人たり、漢の官吏たる張騫が、敵國たる匈奴の地にあつてその王から愛せられ、妻を賜はり、十餘年といふ間、そこに暮してゐたのである。これが私どもの日本人的氣持から見て一つの驚異である。しかして、さらに驚くべきことは、その匈奴單于の優遇にもかゝはらず、なほ心中執拗に「漢節を持して失せず」、機會を見て電光石火の如く匈奴から逃げたことである。民國二十九年、南京陣營に參加し我方とも胸襟を開いて談合しつゝあるかに見せてゐた陶季聖、高宗武の二人は、突然上海を脫して重慶へ向つた。張騫の後、常に張騫ありといふべく、これは張騫の個人的性格と見るよりも、支那民族の民族的性格と見るべく、支那人の腹の中の分らざること昔も今も變りはないのである。

九

私は、さらに、別の機會に於て、張騫の匈奴滯在十餘年の心持を解剖してそこから多くの民族的性格を摑み出し、一行百餘人の大勢だつたものが張騫と匈奴王から貰つた細君と胡人の從者とたゞ三人で歸つた事實、竝に張騫が歸つてから、その匈奴滯在中に得た知識をいかに匈奴征伐に利用したか、さうして、さらに張騫自身軍を率ゐて再び遠征したことなどに關して、詳細檢討し、そこから多くの支那的性格を摑み出し、これを今日の狀勢に照して考へて見たいと思ふ。

一、蒙古研究について

研究の態度

この稿に於て、私は蒙古研究に關する私の率直な意見を述べて見たいと思ふ。尤も、純學問的な研究についてはこゝに論及することを避けたいと思つてゐる。私は今の學問といふものはよく分らないし、また、かういふ問題のこれまでの所謂學問的取扱ひ方に疑問を持つてゐる一人であり、このことに就いても一度は考へを纏めて見たいと思つてゐるけれども、こゝでは暫らく避けて置きたい。從つてこゝに述べる私の意見は蒙古の政策的研究に關するものである。政策的研究といふ言葉は果して適當であるか何うか分らないけれども、一層分るやうに之を具體的にいへば、第一に我々自身の民族生活に關連せしめて蒙古の問題を考へ、第二に蒙古及び蒙古人の將來を考へつゝ之を研究し、第三に世界の平和、人類の幸福といふやうな理想を求め

つゝその結論を見出すといふことである。假りに學問的研究といつても、我々自身の生活に何の關係もない所謂訓詁的、末梢的研究は私共の世界のものでないことは明かであるし、また、一方理想を持たない學問的研究といふものもある筈はないと思ふ。結局學問的研究であつても、右に擧げた問題に關連して考へるならば、それは私のこゝにいふ政策的研究の領域に入るものであり、この稿の議論の對象となる。私は、かういふやうに、我々の民族生活、蒙古及び蒙古人の將來及び世界の平和、人類の幸福といふ三つの問題を掲げつゝ、如何に蒙古を研究すべきか、蒙古の何の研究すべきかといふことを考へて見たいのである。

私共は蒙古研究に對し、先づ第一に態度を決しそれから姿勢を整へさうして目的を定めることが必要であると思ふ。態度決せざれば姿勢整はず、姿勢整はずして目的定まるわけがない。目的のない研究は畢竟遊戯であり、個人的興味のほかの何物でもないと思ふ。しからば、その態度を如何に決すべきか。その態度如何によつて目的が定まるものとすれば、先づ蒙古研究の態度を決定することは、研究者自身にとつて最も肝要なる問題であるかも知れない。

蒙古研究の態度は、私共個人として考へるよりも我々民族として考へることによつて定まるべきものだと思ふ。個人的に考へればこそ單なる個人的興味の問題も取り上げられるであらうけれども、之を民族の一員として考へるならば、そこに考へ方が大に變つて來る。個人的興味は影を潜めざるを得ない。尤も、學問には必ずしも民族的に考へることを必要とせず人間として又は人類の一員として考へていゝ部門のものもあるかも知れない。自然科學の如きは或はそれであらう。しかし、社會科學、或は歴史科學といはれるやうな我々の民族生活と直接關係のあるものについては我々は民族的思索を離れて考へるわけにはいかないと思ふ。家庭を離れて人間の生活はなく國家を離れて個人の生活はないと同じく民族を離れて我々の生活はあり得ないと思ふ。故に私の所謂政策的研究といふものは單にこゝで述べる蒙古研究と限らず一切の研究の基礎を我々の民族生活の上に置かんとするものである。殊に、滿洲、蒙古、支那などの大陸及び大陸諸民族の研究は飽くまで我々の民族生活を基礎として考へなければならないと思ふ。何故なれば、それらの地域及びそれらの民族は直接しかも迅速に我々の生活に影響を及ぼして來るからである。共存共榮といつたところで、我々自身が生き得ないで人を活かすことが出來ないことは勿論であるし、それから同甘共苦といつても、おのおのその民族的立場により甘苦

を異にする。彼の甘なるもの我が苦なることがあり、我が苦なること却つて彼の喜ぶものたることがあるかも知れない。我々は、結局、先づ我々自身生きることを考へ、然る後、或は出來得るならばこれと共に他をも活かすことを考へなければならない。私が蒙古研究の態度を先づ民族主義的思索の上に置くべしといふのは、この趣旨の上に立脚するものである。即ち、我々自身民族として生きるといふこと、一切の研究の基礎をこゝに置くべきである。さうすれば態度は直に定まり、さうして定まつて動かないであらう。

研究の目標

右に述べたやうに、私共の蒙古研究は、飽くまで私共日本民族としての民族的立場で行ふ。それは我等の仕事として極めて當然なことでありそこに毫も疑問を挿しはさむ餘地はないと思ふ。たゞその仕事を行ふに際してその仕事の内容とその環境とを考へなければならない。それはその仕事の圓滿確實なる實行を圖るためである。假りに之を農耕に例へて見る。我等の欲するものは米であり或は棉花である。しかし乾燥甚しければ稻は植ゑられず、また地味磽确であれば棉花を栽培するわけにもいかない。また、我々が之を欲しても實際仕事に當るもの自身が之を必要とせず又これを欲しないこともある。これらの仕事は決して成功しない。何故なれば天の時、地の利、人の和を誤つてゐるからである。如何に努力しても結局無駄となることがある。蒙古研究は、蒙古の研究であり、從つて研究の對象は蒙古及び蒙古人である。故に蒙古に於ける天の時、地の利、人の和を考へて行はなければならない。即ち私共の蒙古研究は、我々自身の民族的立場に於て蒙古及び蒙古人の立場と睨み合せながら行はれなければならない。一面、我々の研究であり、他面、蒙古及び蒙古人のための研究であらねばならない。そこに初めて生きた研究が行はれる。机上の研究でなく實地の研究、空想でなく現實の仕事となり、そこに潑剌たる生長發展を見ることが出來るのである。

蒙古は我等東亞共榮圈の一翼をなす最も重要なる土地の一つであり、蒙古人は亦た我々の同志である。蒙古のため蒙古人のための研究も畢竟また我々のための研究である。東亞共榮圈としての日本と蒙古、東亞の大建設の同志としての日本人と蒙古人、共に一體となり、同體同心の姿勢を整へて進むべきである。そこに初めて力强きそして燃ゆるが如き生氣ある研究が行は

れるであらう。蒙古及び蒙古人を無視した研究は、動もすれば、獨善利己的に墮し、理想は低く、而して結局行はれない。私共は蒙古に於ける羊毛改良の研究を振り返へつて見て、果してこの感なきを得るであらうか。蒙古に於ける一切の政策的研究として、若し、それが蒙古の現實並に蒙古人の立場を無視して行はれるならば、贏ち得るものは時と努力の無駄と而して蒙古人心の離反よりほか何物もないであらう。

右の如く、私共の蒙古研究は民族的立場を離れず、しかも又蒙古人と一體になつて進むことが必要であると思ふ。しからば何を目がけて進むべきか。

我々の一切の行動には目的がなければならない。目的のない行動は氣紛れであり、そこに決して確固不拔の進展は現れない。一切の研究も然りである。行動目的も畢竟一つであり、即ち、我々の理想である。研究といひ行動といひ理想に向つて進んで行く一つの歩みに過ぎない。研究は決して理想を求める研究でなくして理想に向つて進む道を求むるものでなければならない。道を求めつゝ進む。そこに眞の研究があり踏んで誤らざる研究があるべきである。

宇宙乾坤萬物の活動を眺むれば、その一切の動きは生を求め存在を求むるところの行動であることが分るであらう。生物は生きんことを求め生きものは在らんことを求めてゐる。生を捨て存在を抛つて消失することがあるとしても、それは、新しき生を求め新しき存在を求むる行動である。萬物の有り方を仔細に檢討して見ると、そこに、かうした一つの定則を發見することが出來るであらう。そこで私共人間の活動を考へて見る。人間は戰ふ。しかし、戰は決して死を求むるものではなくて死中活を求むるものたるべきである。戰爭の目的は決して戰爭そのものではなくて一つの大なる平和を求むる道であることはいふまでもないことであらう。八紘爲宇といふ。それは畢竟世界大同の道であり、大平和を求むる道ではなからうか。大平和とは世界の平和と人類の幸福の存在する或る物である。それは人間の理想であり我々の目がけて進むべき目標である。我々は大平和を理想として進む。即ち、世界の平和と人類の幸福とを求めて行く。縱ひ、私共の小さい研究でも、理想は高く掲げてこの大平和に目標を置くべきであると思ふ。さうすれば我々の目標は搖がず燦然として光周く四海を照らす光榮ある研究を進めることが出來る。

之を要するに日本人の蒙古研究は、日本民族たる立場に立ち更に蒙古及び蒙古民族の立場を

考へつゝさうして世界の平和と人類の幸福とを求めて進むべきであると思ふ。

研究の方法

かくの如き蒙古研究の態度は或は從來の所謂學問的研究と大いに異るものかも知れない。しかし、これからの蒙古研究はこれでなくてはいけないと思ふ。

蒙古研究の態度が右の如く定まつたとすれば、自然その研究の方法も改められなければならない。かつて如何にいゝ研究が行はれたとしても、現代に於ては現代的研究が行はれなければならない。考へ方においては現代的研究といふだけでは力が弱く、蒙古の將來を考へつゝ研究を進むべきである。研究者は先づ蒙古の夢を描き、さうしてその夢を現實に持ち來す研究に努力すべきである。前項に述べたやうな態度を以て蒙古の夢を描くならば、その夢は決して妄想ではなく、實現され得べき正夢であるであらう。夢を持てばこそ一切の生活が潑剌として生きて來る。人生でさへ夢を持たなければ淋しい。淋しい人生で果して何が出來るであらうか。

これまでの蒙古研究は多く机の上でなされた。萬卷の書に埋もれながら外で戰つてゐるのも知らずに學問することを以て誇りとしてゐた時代の遺風である。かういふ人は恐らくは夢を持たないであらう。たゞ兀々と努めてゐるが、尺取虫のところ定めず身のつき當るに任せて尺を取つてゐる如く、たゞ身邊の書物について考へてゐるだけで、恐らくは生きてゐる世界の夢を持たないであらう。ほかのことはいざ知らず、蒙古研究に關する限りかうした態度は改めらるべきであると思ふ。

これまでの蒙古研究には二つの難點があつた。一つは、蒙古人は殆んど自身の記錄を持つてゐず、從つて蒙古研究は多く支那の文獻及び西洋人の記錄によつてなされねばならぬといふこと、二は、蒙古研究者の多くは蒙古及び蒙古人といふものに對し殆んど何等の體驗をも持つてゐないといふことである。支那人は古來自ら中國と稱し四圍の民族を夷狄視してゐた。蒙古民族も一北狄として支那人から蠻族視されてゐた。或は懼れられたことはあるかも知れない。けれども決して尊敬されず常に蔑視されてゐた。蒙古人蔑視の念は今でも支那人の心にこびりついてゐる。支那人の知識人に於てまた商人に於てさらに農夫苦力に於てさへ蒙古人を輕視し馬鹿にしてゐる事實を私は現地に於て幾度か見てゐる。かういふ支那人によつて、殊に文を飾つ

て自らを巧みに粉飾する支那人によつて書かれた文献から蒙古の眞を探らうとすることは極めて困難なことである。動もすれば自ら知らずして支那人の先棒を擔いでゐるといふやうなこととともなる。更に、支那の文献では蒙古の言葉を元來音標文字でない漢字で表はしてゐる結果、その漢文を日本讀みにして閲讀する習慣を持つてゐる日本人にとつては是れまた極めて難解なものである。これまでの日本の學者はかうした語句や文字を解釋するだけで並々ならぬ努力を拂つてゐる。短い一生をたゞ字句の解釋に汲々として辛苦してゐる哀れな人々を學者と呼ばざるを得ない結果ともなるのである。

蒙古軍が西征して一時歐洲にまでその勢力を及ぼし、また、蒙古建國後蒙古と歐洲との間に交通が開かれローマ法皇の使節が蒙古の首都和林（カラコルム）に來るなど白人の蒙古に入り來るものもあり、その結果、蒙古に關する白人の記錄が相當多く現れ古代蒙古の資料として世に行はれてゐる。これらは無論當時の白人の見聞を記錄したといふ點に於て一重要資料たるを失はない。たゞ注意すべきは、我々が蒙古及び蒙古人を研究する上に於て、それら白人の記錄はやはり參考資料であつて、それを根本の基礎とするわけにはいかない。ドーソンの蒙古史は蒙古軍西征の歴史を知る上に於て西洋人の記錄として重要な資料であるけれども、その内容は飽くまで西洋人の見方であつて蒙古及び蒙古人の性格は必ずしも本格的に記述されてゐるとは云はれない。マルコポーロの紀行は有名なものであるけれども、それは當時歐洲人にとつて未知の世界であつた東洋の旅行記として白人によつて記された浦島物語り的記事として廣く行はれたもので、その内容は怪奇なものが多く地名などその表現が粗雜でこれを現實的記錄として見る上に於ては極めて難解である。さうして苦心困難して讀んで見ても當時の一白人青年のお伽噺的物語たる以外の何物でもない。之を以て元代の政治或は文化を知らんとしてもその得るところ極めて少い。マルコポーロは支那の歴史、文學、思想といふやうなものを何等知るところなしに眺めたからである。子供が動物園へ行つて動物を眺める如く、それら動物の形や姿は分るとしても、それらの動物の本當の性格や社會生活といふやうなものは分るわけはない。西洋人の蒙古或は支那に關する記錄にはこれに似た種類のものが多い。自然科學に關しては多くの重要記錄を發見することが出來るけれども、人文科學に關してはこの感が深い。

日本といへばフジヤマ、ゲイシヤ、茶の湯、生花をいひ、それを以て日本の姿と思つてゐる

西洋人が少くなかつたであらう。さうした日本に對する認識不足が日本民族の發展を輕視して之を押へやうと考へたり包圍政策を弄したりして、結局今日の大東亞戰爭を招致したとも考へられる。蒙古や支那に對する西洋人の認識もこの範疇を出ること幾何でもない。私共が支那に永く住み好んで支那の歷史を讀み支那の文學藝術に親しみ支那の政治の表裏を見、支那の社會のどん底まで涉り歩いてさうして西洋人の書いたものに接して見ると、その觀察如何に西洋人的であり如何に皮相的であるかを知ることが出來るであらう。我々日本人の日本研究がその民族的立場に於て我々獨自に爲さるべきものたると同じく、蒙古や支那の研究も、東洋人たる立場に於て我々獨自の意圖を以て爲さるべきである。自ら蒙古及び支那に關する基礎知識を持つて西洋人の書いたものを讀めばこれを批評することも出來、一方また參考として得るところも多くあるであらうが、基礎知識を有せずして之を讀むとその西洋人的見方に誤られることが多い。殊に西洋人の書を以て蒙古を學ぶ入門書となすなどは、民族的立場に立つて蒙古を研究すべしといふ見地から見れば之は一つの外道である。支那に關しても同樣である。

日本のものでも日本人が知らないでゐて西洋人から敎へられて初めて分つたものがあるともいはれる。浮世繪の如きがこれであるといふ。多くの浮世繪嗜好者などがかういつてゐる。しかし、私はさう思はない。從來日本人が浮世繪の美しさをいはなかつたのは、その所謂藝術的價値に對する盲目であるといふよりも日本的觀察から來てゐると思ふ。東洋的道德觀、日本的倫理觀からかうしたものに觸れることを殊更に避け殊更に無視した結果であると思ふ。悲しい場合でも悲しくないといふ場合もあるし、樂しくても樂しいといへないこともある。それは日本的倫理觀である。さうして日本的倫理觀によつて無視されてゐた浮世繪が本能主義的であり、自然主義的である、西洋人によつて取上げられたといつて何の不思議でもないのである。決して浮世繪論者のいふ如く私共は西洋人によつて浮世繪の美を敎へられたものではない。今でも、縱ひ西洋人から敎はつて浮世繪の美しさを知つたといふ人でも、恐らくはその浮世繪を正面床の間にかける人はないであらう。また、浮世繪などを床の間にかけてゐたらそこの主人の趣味嗜好の程度も窺はれて輕蔑されるであらう。さうしたところに純日本的な倫理觀があるのである。かうした日本精神は恐らくは西洋人には分らないと思はれる。何といつても日本のことは我々日本人が一番よく知つてゐると同じく、東洋のことは我々東洋人が一番よく知つてゐる筈

である。西洋人のものを參考にし資料とすることは必要であるけれども、東洋のことを西洋人に學ぶことは極めて危險である。これは支那研究に對して私の常に思つてゐることである。蒙古研究に關しても同樣である。

しかしながら、我々は西洋人について學ぶべきことがある。それは研究の方法である。即ち、結果ではなくて方法である。西洋人の東洋に關する著名な著者は殆んどそのすべては自から東洋の土地を踏んで書いたものである。短くも數年、または數十年に及んで東洋に滯在し實地に研究して書いたものが多い。私共が見てその結論に異論があるとしても、彼等自身の見解としては確かに權威を持つものといはなければならない。殊に支那及び蒙古奥地に於ける自然科學的研究に於ては殘念ながら西洋人の研究に賴らなくしては手がつかない部門もある。彼等は現地を踏んで身に體驗して實地に則する研究を爲し遂げてゐるからである。彼等は何もその能力に於て我等より優れてゐるとは限らない。たゞ、豫備知識を有し現地を踏んでゐるといふ點に於て優れてゐるのである。そのことはこれから蒙古を研究すべきものにとつて學ぶべき點であると思ふ。先づ、豫備知識を有して而して現地を踏むこと、そこから新しい蒙古研究が生れなければならないと思ふ。

昭和八年私が海拉爾に赴任するとき、その送別の意味を以て開かれた晩餐の席上に於て、東方文化學院評議員の歴史專攻の某博士が、蒙古の歴史を讀んでゐてもその土地の狀態がよく分らないのでといふやうなことを述懐されて、先づその土地をよく知ることが蒙古研究にとつて必要なことを教示されたことがあつた。現地を踏み得難かつたこと、これが從來蒙古學者の一つの惱みであつたと思ふ。從つて、しぜん、文獻のみを引繰り返し其の字句地名などの研究論爭にその半生の精力を絞るなどといふことにもなつたのである。現地を踏まずしてその地の地理を語つて人に迫まるものあるわけはなく、また、現地の地勢、現地の人々の人情、生活に明かならずしてその國の歴史を明快確實に語り得る筈はないのである。支那についていへば三國史を讀んで今の支那人及び支那の社會を眺めて見ると三國時代を眼のあたり見てゐるやうに感ずるが、これを逆に考へると、今の支那及び支那人をよく眺めてさうして三國志を讀んで見れば、その三國時代の樣相をはつきり摑むことが出來るともいへるのである。論語を讀み孟子を繙いて見ても、これを眼のあたり見る支那の社會に相照して初めてその眞味を悟り、孔子の時代

も今の世も支那の社會といふものは格別變つてゐないと感ずる。史書を讀むにしても、また百家の書を讀んでその味を會得するにしても、現地及び現地人を知ることの如何に肝要であるかが分るのである。その土地を見ずその土地の民族生活を知らずしてその土地及びその民族の研究を爲すことは勞多くして功少く、且つ、時に大なる誤りをなして而して之を悟らざることがあり、危險である。

こゝまでいふと、もう、私のいはんと欲する蒙古研究の方法はおのづから明かであるであらう。豫備知識を持ち而して實地について研究すること、それである。蒙古のやうな地文學的に特種な地域を形造り、また、人文學的にも他の地方と異り現代離れした特種な民族生活をしてゐる土地の研究は、現地を知らずしては絶對に出來ないといつても不可はない。蒙古高原を日本の土地に對する知識で以て推して考へ、蒙古の民族性を日本や支那の民族生活を基準として考へるならば、それは如何に滑稽なものであるか、一度蒙古の土地を踏んで見たら直に分ることであらう。

しかし、この點に於ては私共現代人は惠まれてゐると思ふ。昔の人は蒙古へ行くなどゝいふことは殆んど不可能に近いと思はれるほど、困難なことであつた。恐らくはこれまでの蒙古學者の歎きはそこにあつたであらう。しかし、現在、蒙古に興味を持つ私共は、或は蒙古に於て蒙古人と共に仕事をし、或は必要に際して蒙古に行くことが出來る。即ち、多くの人はすでに蒙古を身に體驗して居り、また、身に體驗し得る人々である。蒙古はすでに他事ではなく我事である。縱ひ、外蒙古や西部蒙古、新疆地方は現在なほ身自ら之を踏むことは出來ないとしても、我々が踏み得る蒙古の土地をよく踏みしめ、そこの土地、そこの民族生活をよく身に體驗して而して外蒙古のことを考へ西蒙古、新疆、青海のことを推究するならば、その眞を摑むに略ぼ誤りがないであらう。この點に於て、東部蒙古、內蒙古を身に體驗した私共は惠まれてゐるといはなければならない。勇を皷してその研究の歩を外蒙古、西蒙古、青海、新疆にも進むべきである。

蒙古の理想

漠然たる蒙古研究は動もすれば個人的趣味に陷りがちとなる。民族を擧げて新秩序建設に血

みどろとなつてゐるとき單なる趣味的研究は許されない。縱ひ學問と名づけたところでそこに民族の進むべき何等の理想をも持たないならばそれは碁を打ち將棋を打つて隙をつぶす老人趣味と何の變りもなく、個人的樂しみ以外の何物でもない。私共は須く蒙古の理想を求むべきである。我等日本民族としてまた蒙古人の身にもなつて、さうして世界の平和と人類の幸福とを考へるならば、しぜん、蒙古の理想も求められるであらう。しからば如何にして蒙古の理想を求むべきか。

先づ蒙古の夢を描く、私共は蒙古の歴史を讀んでかの英傑ヂンギス汗の雄圖を思へばそこに我等の民族的血の湧き立つを感ずるであらう。その血の湧き立つところ、そこに一つの夢が描かれる。蒙古草原をめぐり歩き百花繚亂たる間に無數の家畜が放牧され蒙古人が馬に鞭打つて駈けめぐつてゐるのを眺むれば、そこに絢爛たる草原王國も考へられる。それも一つの夢である。さらにまた、外蒙古の共産化、西蒙古の分離、而して蒙疆及び滿洲國蒙古に於ける漢人進出の實狀を見ると、蒙古はこれでいゝかとも思ひ、これではいかんと思へば、別に蒙古の將來を考へざるを得ないであらう。そこにまた一つの夢が描かれる。蒙古を思ふとき蒙古を眺めるとき、つぎつぎと蒙古の夢が現れる。しかし、それは夢である。夢なれば消え失せることもあらうし、また現實に移して行ひ得ることもあるであらう。それが果して夢か現か、それを實際に則して考へるところに私のいふ蒙古研究があるのである。先づ蒙古の夢を描きその夢を現實に則して考へる。そこに蒙古の理想を求め得るであらうと思ふ。更に之をぐつと私共の身邊に下げて考へて見る。

蒙古草原をめぐり歩けば一眸千里の草原に蒙古人は太古さながらに水草を逐うて暮してゐるのを見る。誰でも蒙古人の定住農耕といふことを考へる。また、蒙古の牧畜は原始的放牧を主とし家畜は何等人爲的改良も施されず、羊の毛は粗毛多く高級製絨に適しない。故に蒙洲羊毛を見馴れてゐる人は誰でもすぐ蒙古羊の毛の改良を考へる。しかし、それらは共に一つの夢でなければならない。それらの夢を現實に移すためには先づ蒙古及び蒙古人といふものを研究することが必要である。即ち、定住農耕　羊毛改良の方法を研究する前に、先づ定住農耕、羊毛改良が行はるべきか否か、また行つていゝか何うか、さうした問題を蒙古及び蒙古人の立場に立つて十分研究して見ることが必要である。改良、改善も無論必要だがその前に現狀及び何故

現狀かくの如くであるかといふことを考へて見ることが一層必要である。例へば蒙古人の生活改善を考へるについても、蒙古人は何故今日まで遊牧してゐるかといふことを先づつきつめて見ることが必要である。それを考へて見ると、蒙古の土地や氣候によつて自然に定まる蒙古人の生活、即ち、防寒と食物、それと關連して行はれる牧畜など、多くの問題が踵を接して現れ來るであらう。また蒙古人の定住農耕を考へるとしても、過去に於ける蒙古人定往農耕の結果を眺めて見ると、そこにまた極めて重要なる多くの問題が提供されてゐる。即ち第一に灌漑と氣象、それから定住農耕と牧畜との關係並に蒙古人生活の農耕化とその耕地の周圍に迫つてゐる根つからの農耕民族たる支那人との關係等幾多の問題がある。蒙古の土地と氣候とを眺め蒙古民族の將來を思つて考へるならば、定住といひ農耕といひ或は羊毛改良といひ、その言簡なるも之を行ふには必ずしもしかく簡單にはいかないのである。さらに最も大事なことは蒙古の民族問題である。

蒙古の民族問題は大きく分けて二つの方面から考へられると思ふ。即ち、一は民族統一の問題であり、二は民族性格の問題である。その何れの問題を研究するとしても、先づ現狀をあるがまゝに正確に眺めることが必要である。その蒙古及び蒙古の現狀を考へつゝ、蒙古の歷史を考へ傳統を重視し、更に現在の複雜なる對外關係、東亞共榮圈の一翼としての蒙古の占むる重要性を考へつゝ蒙古民族の將來に對する設計を描くべきであると思ふ。

私共は一口に蒙古といふが、蒙古とは果して何ぞや。國か民族か果た土地か。こゝに一つの重要な問題がある。先つこの問題を考へて見る必要がある。蒙古の統一ならずして東亞共榮圈の完成も期し難いではないかとも思はれる。滿洲及び蒙古は之を歷史的に見、傳統的に見て決して支那の版圖ではなかつた。しかし滿洲は獨立し滿洲建國は成つた。次に來るべきものは蒙古民族の統一と蒙古の建國ではなからうか。これは蒙古の現狀に鑑み極めて難しい問題である。しかし、難しいからといつて決して拋つて置けない問題でもある。何故なればそれは亦た我國の求むる新秩序完成の一つの段階であるとも思はれるからである。

蒙古建國は蒙古人の建國でなければならない。蒙古建國成つたが內容は漢人の民族集團であるといふやうな有樣ではいけないと思ふ。こゝに於て蒙古民族と漢民族との關係、蒙古民族の漢民族化などゝいふ是れ亦た極めて重要な問題が現れる。蒙古民族と漢民族とは蒙古民族の民

族的誇りに於て融和し得べきか否か、假りに融和すればその結果は何うなるか。かうした問題を、現狀を見、歷史に照し、一方漢民族の性格を考へつゝ研究することがさし當つての緊急課題でもある。蒙古に徒らに人口が殖えるばかりでもいけない。その人口の增加は蒙古人の增加でなければいけない。こゝに蒙古の人口問題といふ是れまた一つの重要な問題がある。

かうした蒙古民族の統一、民族の問題を考へつゝ、その基礎の上に立つて之と平行して更に蒙古の政治、產業、交通、文化等一切の問題を研究することが必要であると思ふ。さうすれば、蒙古研究は雜駁無目的に走らず個人趣味に墮せず、我々の民族的立場に於て、さうして他面蒙古及び蒙古人のために、更に世界の平和と人類の幸福とを求むる一段階たるべき東亞の新秩序を求むる目標を目指し、搖ぎなき態勢を以て進むことが出來るであらう。

二、蒙古の將來

(一) 蒙古の將來

蒙古の將來を考へるには先づ第一にその過去を顧みることが必要であると思ふ。過去を顧み、現狀を見、何故現狀斯くの如きかを檢討して然る後其の將來を考へるならば、將來の夢を描くとしても、其の夢は多分の現實性を以て現れるであらう。

蒙古は曾つて國を持つてゐた。かの成吉思汗の大蒙古帝國のことは今更いふまでもない。それから次に大元帝國である。この二つの蒙古人の國を比較して見ると、そこに明かに異つた二つの性格を見ることが出來る。卽ち、一は蒙古民族自身の國であり、二は蒙古民族が漢民族と共に國を立てたものである。而して、前者に於て蒙古人は榮え興隆し、後者に於て蒙古人は衰

へ頽廢した。卽ち蒙古人は草原に遊牧して居れば民族的純血を保つて榮え漢民族の中に入れば、民族的純粹性を失ひ却つて民族としては衰ふ。後者に現れるものは成吉思汗の傳統を保つ純粹蒙古人に非ずして宛然漢人である。然も漢人の善いところは攝らず惡いところばかり多く眞似てゐる。

この事實を眺めるならば、蒙古民族の將來に就いても惡い夢は見たくないと思ふ。漢人を眞似漢人と共に國を爲すことの果して如何なる種子を蒔くものであるかを思へば、蒙古將來百年の設計も自然立案されるであらう。卽ち、蒙古民族獨自の國を造ることである。而して牧畜立國を國是とし漢人の入國を制限することである。更に最も大事なことは蒙古語、蒙古文學の進展、民族傳統の保持を計り、以て蒙古文化の育成に努むべきである。

蒙古將來の夢は大蒙古建國である。其の行程として第一に必要なことは人口の增殖、第二には支那との完全なる分離、第三には滿蒙交通の開發、卽ち、張家口より支那を通らず直接滿洲に連絡する鐵道を建設することである。

（二）蒙古の大道

一

雨降つて地固ると云ふが、蒙古と日本との關係ほどこの感を深うするものは無い。弘安四年蒙古の襲來は我國上下を震撼せしめたが、國軍の勇奮と神風の加護とによつて之を擊退、蒙古軍の殘るは只三人と云はれたほどの戰勝を擧げた。然し蒙古襲來は當時餘程の衝動を國民に與へたものゝ如く、私共は子供の時泣けば蒙古來ると言つて威かされた。それにも拘らずその後の蒙古と日本との關係は些の蟠りもなく、正に雨降つて地固まるの譬に漏れず日蒙親善融和の關係を續けてゐることは注目に値する。日本遠征失敗のその當時に於てさへ、元朝はその初志を拋つて光風霽月の如く慘敗の怨を捨てゝ日本との和親交易を考へた。かくして多くの日本僧の入元が行はれ、その間、大いに元朝の優遇を受けたものさへ少くなかつた。今日に於ては、

曾つての蒙古襲來を言ひながらも我國の何人も現在の蒙古及び蒙古人に對して敵劾の目を投げるものなく、又蒙古人の何人も日本に對し七百年の恨を懷いてゐるものはない。かうした日本と蒙古との關係に於て、そこに私共は他の諸民族に對するものとは異つた特殊の關係を眺めることが出來る。支那人は民國革命の當時に於て、二百數十年前の揚州十日の恨を言ひ、荆州滿人虐殺を以て之に報いた。その執念の深さを見るべく、民國後に於ても常に失地恢復を言ひ、我國に對しては機會あるごとに關東州の返還を求め臺灣の奪回をさへ叫んでゐた。こゝに私共は蒙古人と支那人との間に於て、その民族的性格の甚しく異れるを見るであらう。

日本と支那との關係について同文同種と云ふことが謂はれるけれども、然し、實際仔細に見れば、日本語と支那語とは單に同じ文字を使用してゐるに過ぎず、決して同文ではなく、支那語の構成は、寧ろ日本語と異つて歐洲諸國の言葉とその軌を一にしてゐる。之に反して、日本語と蒙古語は共にウラルアルタイ系に屬して全くその構成を同じくしてゐる。同文の關係は之を日支間に見ずして、寧ろ日本と蒙古との關係に於て發見することが出來るのである。更に之と同じ關係が夫々の民族的性格に於ても眺めることが出來る。種族的關係に於ても日本民族と支那民族とは決して同種ではなく、同種的關係は寧ろ日本人と蒙古人との間に於て眺めることが出來る。殊に、その民族的性格に於ては、日本人と蒙古人との間に、日本人と支那人との間に於けるものとは比較にならぬほどの同型を見る。卽ち、日本人と支那人とは寧ろ對蹠的であるのに對し、日本人と蒙古人との間には甚しい類似性を見るのである。

かく考へて見ると、曾つて蒙古襲來の葛藤ありしにも拘らずその恨を拋つての日蒙和親の眞實性を理解することも出來るであらうし、又將來も不安なくこの形を續けて行くことをも信じ得るであらう。蒙古の完成繁榮は我々の完成繁榮でもあり、蒙古のことを考へることは我々のことを考へることでもある。眞に日蒙一帶の關係をこゝに見ることが出來るのである。蒙古の夢は卽ち我等の夢である。

二

夢は五臟の疲れとも云はれるけれども、然し、山に登る前夜、山に登る夢を見ること多く、夢は必ずしも假空ではない。世が澆季ともなれば、夢に周公を見ずとも曰はれる。現實に則し

て理想あり、理想あれば夢も現る。夢は正夢と云ふが、たゞ其の來るを持つことなく之を現實化することに努力するところに夢の正夢たる所以があるのではないか。曾つて蒙古で暮し蒙古人と交はり、草原に起き臥して明け暮れ蒙古と蒙古人のことを考へてゐた私には、今でも眼をつぶれば理想化された蒙古の姿が彷彿として眼前に現れる。それが私の蒙古の夢である。蒙古將來の大道をそこに見出だすことが出來るのである。

世界の屋根といはれるパミール高原から崑崙、阿爾泰の二大山系が蜿蜒と東して大興安嶺に連なる。その二大山系の間に挾まれた廣大なる高原、その高原に國を爲して大蒙古帝國と云ふ。それは嘗つてヂンギス汗の建てた大蒙古帝國の再現でもあり、又、さらに、東亞共榮圏の一翼として世界的に飛躍する新蒙古の姿でもある。內蒙古も外蒙古も東蒙古も西蒙古も打つて一丸となつて大蒙古國を建設し、各蒙古は自治王國を爲し、國內に夫々公國あり、各蒙古王公之を支配し、その聯合國家たる大蒙古帝國には滿洲國皇帝が蒙古國の大帝として之に君臨ずる。

阿爾泰山は蒙古語で金（アルタン）の山である。興安嶺も滿洲語の金山の轉名であるといはれる。かくの如く高原周邊の山嶽地帶に金を產し、之に續いて大草原あり大放牧行はれ、春が來れば百花繚亂と咲き、みだれ秋が來れば萬馬太つて北風に嘶き草原の繁榮を示す。蒙古を不毛の地といふものあらばそれは水田を指して泥濘といふと同じである。蒙古草原は不毛に非ず世界にも稀な立派な牧草原である。

蒙古と支那との境は、萬里の長城の內長城線を以てし、支那は濕潤なる平原にして農耕の國、蒙古は乾燥せる高原にして牧畜の國、そこに、地文的にも人文的にも明確な區別が示されてゐる。大元帝國の支那征服も今は昔の夢であるけれども、それと同時に支那民族の長城外進出も嚴格に精算さるべく、蒙古高原は正に蒙古民族の理想鄕として大きく浮き出される。蒙古と支那とを繫いだ張家口北京線は一の支線と化し、幹線は張家口から東に延びて新たに滿洲國と繫がる。卽ち、蒙古高原橫斷鐵道は、東、滿洲より起つて、西、中央亞細亞に至る。中央亞細亞の血脈は東して日本海に注ぐ。夢の國お伽噺の國と思はれた西域三十六箇國も今や隣人の親しみを以て我等に近づいて來る。かうしたことが果して單なる夢であらうか。又、單なる夢であつていゝであらうか。

三

第一に蒙古統一を考へて見る。これは其の構想に於て新たなる統一又は併合でなくヂンギス汗蒙古への復歸である。ヂンギス汗以來、蒙古は嘗つて、今日の如く分離したことはなかつた。ヂンギス汗は蒙古各族を統一し、塞外各地を併せ收め、所謂蒙古大帝國を創立した。その國土は大體に於て今日の滿洲國、蒙疆、外蒙古、西蒙古の各蒙古を基幹としてゐた。二世大宗、三世定宗と次第に國土を擴張し、五世忽必烈に至つて支那全土を征服し、大元帝國を建て、その領域に於て世界最大の國を現出せしめた。元滅び明起るに及んで蒙古族は支那を棄てたけれども、ヂンギス汗時代の蒙古は大體に於て之を保つてゐた。漢民族たる明朝も强ひて之を收むることを爲さず又その力もなく、却つて萬里の長城を補修增築して之を以て蒙古と支那との境とした。それが今日は山海關から古北口、八達嶺及び山西省の殺虎口を過ぎ黃河を渡つて西は嘉峪關に至る所謂內長城である。この內長城外の地帶は嚴格な意味に於て明國の領土でなく所謂蒙古であつた。大元帝國は滅び曾つて征服した支那本土は之を棄てたけれども、その後と雖も蒙古及び蒙古人は毫も漢民族の支配を受けてゐなかつた。蒙古は蒙古人の蒙古であり、蒙古人はヂンギス汗一族を中心とした一大家族的種族として續いてゐた。たゞ元朝末期に於て帝位相續が紛糾を極めてヂンギス汗の正統が亂れ、元帝國滅亡と共にヂンギス汗直系の宗家が影を失ひ、各部族割據の形に於て各蒙地を形成してゐた。然し、それら各部族にしても、夫々ヂンギス汗の後裔であり、全體として蒙古族は依然ヂンギス汗部族たることには變りない。かくして、清朝時代に入つた。

清朝の對蒙政策は懷柔政策であつたといふやうなことが普通に云はれてゐる。然し、仔細に清朝の蒙古及び蒙古人に對する政策を見れば、必ずしも蒙古族の弱衰を目標としたとは考へられない。清朝の喇嘛教尊崇も決して世に謂はれてゐる如く蒙古民族を弱めることを目的とする單なる功利的なものでなく、蒙古人の求め欣ぶものを與へたのである。清朝の政策は無論懷柔撫民の色彩を多分に含んでゐた。比較にならぬほど少數の滿洲族を以て漢族、蒙古族等多數多種の異民族を統治するためにはさうした政策が必要であつたのである。さうして清朝はその異民族に對する懷柔政策、今風に言へば文化政策に於て確かに成功したとも云へる。漢民族は清

朝支配の下に却つて榮え漢人朝廷統治の下に於てさへ見られぬほどの平和と文化的隆盛とを得、清朝の聖威四海に周く、その遺德は清朝滅亡の後にまで及んでゐた。漢民族に對しては儒教を尊崇し、佛教を保護し、其の民衆宗教とも云ふべき道教的諸教をさへ一概に之を迷信として排せず、民の心を心として之を保護尊崇した。蒙古に於ける喇嘛教尊崇も全く之と同じく蒙古人の唯一の宗教であり蒙古人の好むものを尊崇したものである。必ずしも勇猛果敢な蒙古人を弱めその民族を弱滅せしめる政策として之を行つたものとばかり考へられない。清朝三百年の間、又清朝滅亡後に於ける蒙古人の清朝並に清室の血緣を引く現滿洲國皇帝に對する態度を見れば明かにこの間の消息を窺ふことが出來る。大清帝國建國の當初に於てこそ蒙古族一部の反抗、叛亂もあつたけれども、清朝の基礎定まり其の施政宜しきに及んで全蒙古民族は喜んで、その統治に服した。蒙古王公は清朝の封冊を受け之を宗主として仰ぎ、その支配を受くることを寧ろ榮譽とさへしてゐた。滿洲、蒙古の民族は全く一體を爲す姿を呈してゐた。清朝は支那人に對しては滿漢差別の政策を取り其の相互の結婚を禁止し極力その兩族の血族的混合を避けてゐたけれども、蒙古王公に對しては時に清室公主を降嫁せしめ之との姻親を求めてゐた。同じく北方民族として滿洲、蒙古兩民族親和の一端を察知すべきである。この關係は清朝時代のみならず、清朝滅んだ後にまで及んでゐる。

かくの如く蒙古族は上王公より下庶民に至るまで、清朝を宗主として仰ぎ、喜んでその支配を受けその統治に服してゐたのである。全く、蒙古人は清朝の民であつたのである。即ち、滿洲族たる清朝の支配に服し其の民たることを喜んでゐたのであるけれども、漢人の國たる中國の民に非ず、又決して漢人の支配を受けてはゐなかつたのである。清朝の制度にしても、蒙古、西藏、回教族等各藩部を統治する中央機關たる理藩部は大臣以下下級職員に至るまで悉く滿洲人或は蒙古人等を以て組織され、漢人は全く之に與らず、藩部統治に關しては漢人は何等之に關與してゐなかつたのである。即ち、蒙古人は清朝の民ではあつたが中國の民ではなかつた。この關係は清朝滅亡後に於て極めて明瞭に現れた。即ち、蒙古人は清朝の民であつたけれども中國の民ではないといふ理論から、蒙古族は清朝倒れた後の中國、所謂中華民國の支配を受けることを拒んだのである。これが外蒙古の獨立であり、內蒙古各地に於ける自治獨立の運動となつて現れた。それから後の中華民國と蒙古との關係は、武力的關係に入り、清朝時代とは異

れる樣相を呈して滿洲の建國及び蒙疆政府成立にまで至つた。滿洲建國に際して東蒙古は漢人の國たる中華民國の羈絆を完全に離脱して滿洲國の支配下に入り、支那事變に際して內蒙古各盟其の他は同じく自立して蒙疆政府を建設した。

以上述べた如く、蒙古人は曾つて清朝の民であり、喜んでその支配を受けたけれども、未だ曾つて中國の民たりしことはなく、又蒙古は清朝の封地ではあつたけれども、未だ嘗つて正式に中國の領土だつたことはないのである。卽ち、清朝と蒙古人は主從姻親の關係があり、蒙古と支那とは相排し排せられるの惡場面を續けて來たのである。萬里の長城は蒙漢兩民族對峙の象徵であり、而してそれは又支那と蒙古との嚴然たる境を爲すものである。

四

蒙古及び蒙古民族に就て、右に述べたやうな歷史的事實を考へて見ると、その結論として、蒙古と滿洲國及び蒙古と支那との關係は極めて自然に浮び上つて來る。卽ち、第一に、蒙古と滿洲國は同じく塞外の國として離るべからざる因緣を有するものであり、殊に清朝宗室の血を引く現滿洲國皇帝は蒙古及び蒙古人にとつても亦た宗主たる關係を續け得るものであるといふことであり、第二に、蒙古と中華民國は完全に分離すべきもので、而してその國境は明代の長城たる內長城線を以てすべきものであるといふことである。こゝに蒙古は稍明瞭な形を爲して現れるのである。

蒙古の現狀を眺むれば、東に滿洲國領蒙古あり、興安東西南北各省及び其の他特別旗等の蒙地を形造つて滿洲國內に於ける特別行政地區を爲し、南に蒙疆聯合自治政京あり、舊內蒙古の地域を以て其の區域として自治政府を形造つてゐる。更に北に外蒙古人民共和國あり、舊外蒙古四盟及びその西の烏梁海、科布多等を包含し、ソ聯の影響を受けて共產主義共和國を形成してゐることは周知の通りであり、又、西部蒙古は更に複雜で、寧夏、青海、新疆各省に亙つて介在し、この間に重慶政權及びソ聯の勢力が錯綜してゐる。

右の如く、滿洲國蒙古、蒙古聯合自治政府、外蒙古人民共和國及び西部蒙古と現在の蒙古は明確に四分されてゐる。この四つの蒙古を統一して大蒙古帝國を建設することが、我等の夢であり、又蒙古の理想たるべきであらう。而してそれは決して新たなる創造ではなく、ヂンギス

汗の大蒙古に還るものであるが、これを現實の狀態に照らせば、之を言ふは易く之を行ふは必ずしも簡單ではない。然し、之を行はんとせば行ふ道はある。その道を求むることが卽ち我等の仕事である。

身を立て家を建設せんとするもの、先づ小より大へ部分より全體へと區分計畫し、漸を以て進むことを設計の方式とする。都市の建設も亦た之と同じく、設計は宏大なりとしても實際の建設は、その緩急難易の度に應じ次第に擴張整備するを法とする。國家の建說も之と同じく、先づ遠大なる理想を立て、その理想に向つて小より大へ易きより難きへと分別計畫して進むことが考へられるであらう。一氣理想を達成せんと焦るよりも之を胸に含めて一步一步着實に步みを續けることが寧ろその效をなす所以である。蒙古の理想は全蒙古及び全蒙古民族を統一する大蒙古帝國の建設にある。然し、實行は先つ易きより着手し行ひ得るものから之を行つて行くことを必要とする。

そこで考へられることは、第一に、蒙古と中華民國との關係の完全なる整理であり、第一に蒙古と蒙疆聯合自治政府との關係の調整とである。蒙古は前にも述べた通り歷史的に中華民國の版圖に入るべき理由なく、その領土的民族的關係よりして當然漢人の國たる中華民國とは別筋のものである。今更分離する性質のものではなく、完來別筋のものである。蒙古の獨立は中華民國よりの分離ではなくて原有の形に復歸するものであり、不法に及んでゐた障碍を除去するものたるに過ぎない。故に蒙古は堂々と獨立すべきである。而して蒙古と中華民國との境界は所謂內長城線たるべきことは前に述べた通りである。何故なれば長城は漢人が自ら定めた北方の境であり、而して、內長城線は明代に於て設定せられた最も新しい境界線たる性質を有するものであるからである。卽ち、內長城線を境として支那と蒙古とを分ち、先づこの限界を明かにし、長城外の地の完全に蒙古たる姿を確立して、而して後、更に蒙古自體のことを考ふべきである。

五

宣統三年、支那に中華民國革命が勃發した時、外蒙古は中華民國に參加せずして別に獨立した。それは蒙古は淸朝の蒙古であつて中華民國の蒙古ではないといふ考へから來てゐる思想の

一つの現れであつた。然るに、昭和七年、滿洲國が獨立した時は、滿洲の蒙古人は欣然として其の獨立に參加した。殊に前清宗室の溥儀氏が滿洲國執政となり次いで皇帝となるに及んで、蒙古人は我が事の如く之を喜んだ。私は、この時、蒙古人と共にゐてその蒙古人の心からなる喜びを實際に見てゐる。中華民國の羈絆を脱する安心と舊主の許に歸る喜びの如くにも思はれた。それほど蒙古人と漢人との民族的確執は深く、又蒙古人の前清宗室に對する感情は血の如き濃さを持つてゐたのである。

かく考へて見ると、蒙古民族の統一が成つた時、その宗主として滿洲國皇帝を載くことは決して無理ではなく、理論的にも實際的にも最もいゝ行き方ではないかとも思はれる。大元帝國の亡んだ原因は色々あるとしても、その重大なる原因の一つは皇位繼承に纏はる同族の爭であつた。而して遂に元帝國が亡ぶと共にヂンギス汗の正統は影を無くした。蒙古王公は大體に於て總べてヂンギス汗の後裔ではあるけれどもその中の大宗家たるべきものが形を失つたのである。清朝が蒙古を統治するに當つて、ヂンギス汗の系統を尊重し其の身分家柄に應じて或は蒙古元來の汗の稱號を許し或は新たに清朝宗室の制に倣つて親王、郡王、鎭國公、輔國公等の所謂王公の稱號を賜はり、更に各々之に封領を賜はつた。現在の蒙古王公並にその封地は總べてこの清朝の制度に由來してゐるものである。元帝國當時皇位を爭つて遂にその衰退を齎らした蒙古各宗族も、清朝統治の後には同族相爭ふこともなく、各々その封地を守つて互に相侵さず、榮爵を喜び二百餘年の平和を享受した。その平和が破れ蒙古人が再び民族衰亡の危險に瀕するに至つたのは清朝末年から中華民國にかけて蒙古と支那との境柵が撤去され、漢人が決河の勢を以て續々と蒙古に入り、蒙古人を驅逐し草原を開拓するやうになつてからである。

然るに今や蒙古人の蒙古は、或は既に成り或に將に成らんとす。今我等が蒙古人と共に求むるものは其の蒙古人の蒙古であり、その統一である。蒙古民族は漢人の羈絆を脱し其の桎梏を離れ内長城線を境として蒙古と支那とを分つ。内外蒙古、東西蒙古全體統一して大蒙古聯合國を形成し、之を小にしては各蒙古自治王領を爲し、之を大にしては大蒙古聯合國となり、滿洲國皇帝を以て宗主と仰ぐ　張家口から南に屈折してゐる蒙古の鐵道を東に延ばして滿洲に入らしめ、これを以て亞細亞横斷鐵道の幹線となし、日本から滿洲、滿洲から蒙古、蒙古から中央亞細亞と、光は東方より西に進む。これが果して單なる夢であらうか。